
月から来た少女 イナイレ

うむうむ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

月から来た少女

イナイレ

【Nコード】

N8583Y

【作者名】

うむつむ

【あらすじ】

雷門中学にやって来た転校生

月影四季菜

彼女にはある秘密があった

月から来た少女 イナイレ

私は月から来た

いつか

かぐや姫のように

帰らなくてはならないのだろうか

やがて

FFIも終わり

桜の季節がやってきた

田舎達は三年生になっていた――

円堂 「今年も同じクラスなんてな」 よろしくな
? (二カッ)

豪炎寺 「ああ、俺の方こそよろしくな (微笑)」

鬼道 「お前達と一度は一緒のクラスになりたいと思って
いた 楽しみだな (フッ)」

ガラガラッ? ピシヤリ?

先生 「おい みんな 席に着け? 今日
は転入生を紹介するぞ」

男子ABC 「おお〜!。...＊ かわいい女だといいな
?」

女子ABC 「ええ〜!!? イケメン君がいいな?
(つてかこのクラスにはすでに鬼道、豪炎寺のイケメンコンビ
がいるけどお (キャア))」

男女ABC 「先生、どっちですか?!!?」

先生 「女生徒だ、月影、入りなさい!」

四季菜 「月影四季菜です...よろしくお願いします」

全員 「……………かわいい……………くない……………
ッ」 (A、;) ガク

皆にそう思われるのも無理はない

なぜならそこに立っていた四季菜は 真っ黒な

髪をきつちり三つ編みお下げにし、牛乳ビンほどの厚底眼鏡をかけていたからだ

その見た目は かわいい からは到底かけ離れていた

先生 「席は学級委員の近くがいいからな、お？ 鬼道の前が空いてるな、月影、あの席へ座りなさい」

「はい」 四季菜はそう言つと席まで歩いていった

後ろの鬼道が話しかける

鬼道 「学級委員の鬼道有人だ、分からない事があつたら何でも聞いてくれ」

四季菜 「はい…」

豪炎寺 「豪炎寺修也だ よろしくな」

隣の席に座っていた豪炎寺もあいさつをしてきた

四季菜 「…よろしく…」

(暗い女だなあ…) 鬼道と豪炎寺はもうコイツには自分から話しかける事はないだろうと思つた

下校時間 キーンコーン

円堂 「月影え？（＾Ｏ＾）」

四季菜 「はい…？」

円堂 「よろしくなっ 俺、円堂守？ サッカー部の
キャプテンやつてるんだ？ 月影は 部活は何か決
まってるのか？ よかったら一緒にサッカーやらないか？（
ニッ」

鬼：豪 Σ（。A 111（汗）ゲッ？ マジかよ？

四季菜 「悪いけど、サッカーなんて全く興味無いんで遠慮し
ときます」

四季菜は愛想笑いもせず淡々と断った

円堂 「？ あれえ お前なんつかサッカー好きなんじゃな
いかな？なんて気がしちゃったんだよね、勘違いだったか、ゴメン
な／／／ まあでも、いつでも気が変わったらきてくれよな
！！」

円堂はそう言つとその場から去つて行つた

鬼道 （どこがサッカー好きそうに見えるというんだ（-。 -；
やっぱりアイツは天然だな…）

豪炎寺 （本当に円堂のヤツ… 誰でもとりあえず誘うんだ
から困つたもんだ 俺や鬼道目当ての女とか断るのに大変だ
つたんだぞ？ 俺達の苦勞も知らないで…）

二人はとりあえずホッとしていた

帰り道――

四季菜は一人考えていた

（アイツ……何で私がサッカー好きだつて分かったんだろう……？
フツ 円堂守……か どんなヤツなのか少し調べてみるか……
…… ついでに鬼道と豪炎寺の事も……同じサッカー部みたいだからな）

私がこんな格好をしてるのも

全ては人を寄せつけないため

ああ サッカー やりたいなあ

でもそんな事したって……私は……

その後

とある数学の授業時間

先生 「この問題はちょっと難しいぞ」 誰か解ける者？
？……… 何だ誰もいないのか？鬼道、お前はどうかだ？」

鬼道　（学年トップの意地としてここはあざやかに解いてみたいもんだが…）

「すみません、時間をかければ解けそうだと思うんですが…」

先生　「そうか、では月影！　転入生の試練だ（笑）出来る所までやってみなさい」

四季菜　「…はい…」

四季菜は席を立つと黒板の前に行った

そしてチョークを手にしたかと思うと糸も簡単に計算式や数式を書いていった

男子A　「あんな式、習ってね〜ゾ??」

女子A　「間違って書いてんじゃないのぉ?」

皆きょんとしていた

先生　「おいおい?　その計算式は中学では習わないぞ?　お前どこで教わったんだ?　もつと簡単な式で書いてくれ!」

四季菜　「すみません、失礼しました…」

四季菜はそう言うと全てを消して一から書き直し始めた

鬼道　（全部消すなんて…?　問題の数式も全て頭に入って

いるというのか…？）

先生 「ご名答？ 良く解く事が出来たな よし、席に着いていいぞ」

豪炎寺 「頭はいいみたいだな」

鬼道 「ああ、いいライバルになりそうだ（ニヤリ）」

しかし体育の授業ともなると四季菜は全く目立たなかった
球技ではボールにふれる事すら出来ず 陸上なんかはいつも最後の
方のタイムだった

豪炎寺 「あいつ、運動神経は良くないみたいだな」

鬼道 「ああ」

だがこの二人の考えは間違っていたことになる

それは放課後のこと

円堂達三人は部活を終え、帰り道を歩いていた

円堂 「…なあ、あそこにいるの 月影じゃないか？？」

豪炎寺 「本当だ、あんなとこで何やってんだ？？」

四季菜は路地の端で一組の親子と話をしていた

女の子 「うえゝん！！うえゝん！！（泣）」

母親 「あんな高い所に引っかけたてはもう取れないのよ、あきらめなさい。○○ちゃん」

どうやら女の子は風船を目の前の高い木に引っかけてしまったようだ
あきらめきれないといった様子でずっとその場から離れない

四季菜 「……おばさん、ちょっとこれ持って??」

四季菜はそう言つと自分の通学カバンを母親らしき女性に手渡した

鬼道 「あいつ、何やるつもりだ??」

四季菜はいきなり風船が引っかった木に登り始めた
そしてあつという間に上の方へたどり着くと引っかかっていた風船
を自分の方へたぐり寄せた

次の瞬間————!!!

一番上から二回転半位のジャンプをして地面に着地した

円：鬼：豪 「……なっ!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」（驚）

円堂 「スッゲええええー?（（（；。D）））））
あんな高い所からジャンプしたよ……っハハッ!!」

四季菜はだまつて風船を女の子に手渡した

母親 「すごい? 本当にどうもありがとございました?
?」

女の子 「お姉ちゃん？ どうもありがとう！ー！」

親子は深々とお辞儀をすると歩いて行った

その後ろ姿に四季菜は手を振っていた

鬼道 「運動神経が無いとは思えないな……？」

豪炎寺 「一体どういうことなんだ……？」

円堂 「おおーい！！ 月影えー！！」

円堂達は四季菜の元へ駆け寄った

四季菜 「！！ タイミング悪っ 見られたか……（汗）」

円堂 （目がキラキラ 「今のすごかったな？？」 やっぱ俺の目に狂いはないっ！一緒にサッカーやろうぜ！ー！」

四季菜 「何度も言うけどそのつもりはない！！ もう私に構わないで……？」

四季菜はその場を立ち去ろうとした

鬼道 「待てっ！」 鬼道は四季菜の腕をつかんだ

四季菜 「痛いっ？ 離して……？」

振りほどこうとするが鬼道はがっちりつかんだ手を離さない

鬼道 「お前、何か裏がありそうだな、何故運動神経がいいのをわざわざ隠している？」

四季菜 「フツ…さすが天才ゲームメイカーさんね、勘が鋭い…」

「私はあなたの事知ってるけどね」

鬼道 「？…」

四季菜 「鬼道有人… 幼少からサッカーの才能がズバ抜けており影山零治に見出される

その後鬼道財閥の跡取り息子となる

サッ

カー界において常に冷静な司令塔をこなした天才ゲームメイカーと呼ばれる 但し影山に翻弄された時や妹の音無春奈が関わりと判断を見誤る傾向あり」

鬼道 「お前…？ どうしてそれを…？」

鬼道は四季菜から手を離れた

四季菜 「まだ知ってるわよ 豪炎寺修也

同じく幼少の頃よりサッカーの才能を開花させ天才エースストライカーと呼ばれる

鬼道と同じで妹の豪炎寺夕香が関わると

冷静さを失う」

「最後に円堂守… 幼少期に祖父のサッカーの秘伝ノートを見つけそれ以来サッカーの虜となる 努力は人一倍 それに伴い根拠が無くても人に対し常に信頼をおく その為信頼をおかれた者は心を開く事とな

り今では多くの者が彼に絶対的信頼を持っている

中でもその二人は特に…ね？

「フッ」

豪炎寺

「お前…何者なんだ…？」

四季菜

「ちょっと調べればすぐに分かる事よ、でも安

心して
ない

私はあなた達の邪魔をするつもりなどこれっぽっちも

ただ毎日平穩に過ごせばいいだけ

だからもう私に話し

かけないで？」

四季菜はそう言つとそこから去つて行つた

謎の少女月影四季菜

あいつの正体は一体…？

昨日あのようなやりとりがあったにも関わらず四季菜は何事も無かったかのように授業を受けていた

円堂達も話しかける事は出来なかった

今まで四季菜に目もくれなかった鬼道が今日は後ろの席からじっと見つめていた

鬼道 （左手首が少し赤くなっている…

昨日

俺がきつくつかんだから…

何だか少し悪い事したな…

こいつ…よく見ると髪が綺麗なんだな、手も細くて雪みたいにも白い

少し覗いてるうなじはもっと透明感がある

眼鏡を取ったら、素顔はどんなヤツなんだろう…？

豪炎寺も同じ事を考えていた

豪炎寺 （こいつ…よく見ると爪の先まですげえ綺麗だな、今

まで気付かなかった　耳も
真っ白で小さくてかわいいな…
素顔も…見てみたい　

鬼：　豪　（はっ？／／／／俺は何を考えてるんだ？
どうかしてる？）

四季菜は二人の視線に気付いていた

四季菜　（マズイ…　二人が私に興味を持ち始めてる…
）

四季菜　「先生　！！」

先生　「どうした、月影　？？」

四季菜　「私、また視力が悪くなってしまっ…ここからじゃ
黒板の字が見えないんです　！　一番前の席にして下さい　！」

先生　「そうなのか、うん…　一番前の席といっても空いて
ないからな…　誰か代わってくれる人、いないか？」

前列に座っている女子全員　「はいっはいっはっい
！！！！？」　手を上げた

「鬼道君や豪炎寺君とお近づきになれるならっつ？　い
くらでも？」　

鬼：　豪　（…）

四季菜　（よしっつ？）

鬼道 「先生！」

先生 「何だ、鬼道？」

鬼道 「月影には今色々学級委員として教えている最中なんです、彼女がスムーズに学校生活に馴染めるよう、僕も責任を持ってやっているつもりです、視力が下がったと言うならそれに見合った眼鏡を一緒に探しに行ってきます…
なので席はこのままをお願いします（キリッ）」

先生 「そ、そうか、分かった（^^;;」

鬼道がそこまで言うならそうしよう

と、いうワケだ、月影、早く新しい眼鏡を買って来いよ」

女子全員 「チエツ？」

四季菜 「学年トップだからって先生も言いなりかよ？」

あゝ やだ、もう」

放課後――

四季菜 「ちょっと！ さっきから何でついてくんのよっ！！」

鬼道 「言っただろう？ 新しい眼鏡と一緒に探しに行くって

…
（ニヤリ）

四季菜 「眼鏡なんか買い替えないわよ、視力が落ちたなんてウソなんだから」

鬼道 「やはりな…フッ」

四季菜 「だいたい何で後ろの二人までついてくんのよっつ！
おかしーでしょーが??」

円堂 「ええっと…あのう……えへっ（汗）」

豪炎寺 「……………（――；）」

円堂 「いやあ俺達、お前の正体気になっちゃってさ（焦）いい加減教えてくれないかな？」

鬼道 「はつきり言おう まずはお前の素顔が見たい」

豪炎寺 「同じく…」

四季菜 （変態…（^^;;））

円堂 「俺達昨日あの後さ、どうしてもお前の事知りたくて理事長の娘の夏未に頼み込んで調べてもらったんだ、そしたら学校に提出された書類に書いてあったような履歴や経歴は全く無い事が分かったって……全てウソ…なんだろ？　なあ、何でなんだ？」

俺達で力になれるなら、話してくれないか？！」

四季菜 「……誰に話しても何も解決しない……何も変わらない
い、変える事なんか出来ないっつー！！
…ウソをついていんだから私はもう退学ね、
皆さん、さようなら ！！」

やっぱり私にはー

希望なんか………ないー

「待つんだ ！！！」

四季菜 「／／／……鬼……道く……／／／」

円： 豪 「！！」

俺は四季菜をとっさに抱きしめていた

鬼道 「す、すまないっ…／／／ ついつ？
諦めないで、話してくれないか？」

鬼道は四季菜から離れた

お前の心の闇を……俺ははらしたい…

円堂 「諦めたら、そこで終わりだ
諦めない限り、終わりはない？ （ニッ）」

豪炎寺 「フツ…諦めの悪い所が俺達のモットーだ？」

四季菜 「……………」

もう一度……

あがいてみても

いいのかも知れない……

私は心を決めた

四季菜 「話を聞きたいならついてきて」

四季菜は細い路地に入ると二つ目の角を曲がった
円堂達はすぐ後ろを歩いて行った

しばらく歩くと一軒の家の前まで来た

円堂 「ここは？」

四季菜 「私の家よ 遠慮は要らないわ、上がって」

円： 鬼： 豪 「お邪魔します？」

四季菜 「そんな大きな声で挨拶したって誰も居ないから」

円堂 「家族は？出かけてるのか？」

四季菜 「父親は亡くなった… 母親は仕事で海外にいるし兄弟も居ないから私一人よ」

鬼道 「結構広い家だな、ここにお前一人だけで住んでいるのか…？」

玄関からリビングへ続く廊下の壁には使い古しのサッカーボールがネットに入って掛けられていた

見た所ドアがいくつもあり部屋数は多そうだ

豪炎寺 「サッカーボール…これ、お前のか？」

四季菜 「（コクン…） 昔はやっていたからね」

鬼道 「幾つ部屋があるんだ？」

四季菜 「八つ…でも実際使ってる部屋は半分だけ…母がこつちに帰った時に使う二つと私が使っている二つ」

円堂 「あれ？ ドアが開いてる、この部屋は？」

四季菜 「ああ、そこは私のアトリエよ 絵を描くのが好きなの」

鬼道 「水彩画、それに油絵もあるな？ どれもすごいな…？ これだけのものが描ければ賞も総ナメだろう？」

四季菜 「コンクールに出した事は一度も無いの…だから賞なんて何にも取ってないわ（微笑）」

円堂 「何でこんなに描いたのに出展しないんだ？自分の実力を試したくないのか？」

四季菜 「私には時間が無いの 賞なんか必要無い、好きな絵を描ければそれでいいの」

四季菜はさみしそうな感じで下を向いた

四季菜 「まあ、とにかく座って、今お茶入れるから、みんな、冷たい麦茶でいい？」

円： 鬼： 豪 「あ、ああ……」

みんなー黙って麦茶を飲んでいた
沈黙が続く中、端を発したのは四季菜だった

四季菜 「さあて、何から聞きたい？」

月から来た少女 イナイレ 第三章

鬼道 「 聞いたら何でも答えてくれるのか? 」

四季菜 「 覚悟は出来てる 」

豪炎寺 「 ならまずは俺から聞く…

お前、どこから来たんだ? 前はどこに住んでいた? 」

四季菜 「 私は……………月で……………産まれたの 」

円: 鬼: 豪 「 ! ! ! つ…月イ…? ? (驚 」

四季菜 「 1960年代に人類が初めて月面着陸したのは知
ってるわよね? 」

実はそれには続きがあつて70年代、80年代、90年代と極秘の
国家機密で人類は何度も月に降り立っているの……」

鬼道 「 確かにあれから人類は月に行こうとしていないのに
は俺としても疑問はあつた

だが何故極秘で行っているんだ? 目的は何だ? 」

四季菜 「 目的? 答えは簡単よ、人類移住計画、まずは科学者
から行って地固めをするってわけ… 80年

代からは地下に大型都市まで出来上がったわ

私の両親は二人共NASAに勤める技術者だったの

二人共月に派遣されて月で年月を過ごすうち……………恋に落ちた……
そして産まれたのが私ってワケ 」

円堂 「 何で人類が移住しなくちゃいけないんだ？ 」

四季菜 「 地球の寿命は限られてる……温暖化によってね、地球が無くなるのはまだまだずーっと何百年も先だけどその時に備えていたのよ、でも…… 」

豪炎寺 「 でも……？何だ？ 」

四季菜 「 私が10歳になるまでは、毎日がとても楽しかった、人口も500人位に増えて、サッカーチームもあったりして……充実していた、幸せだった 」

でも私が10歳になったある日、一人の独裁者が生まれたの、彼に洗脳された人は彼の命令に服従した、洗脳されなかった人もいたけど、彼等が恐ろしくてみんな、言いなりだった……

大好きだったサッカーも娯楽なんかと禁止された……

そして私が12歳の頃私の父親が監視の目をかいくぐって地球にSOSを発信したの

すぐに地球から私達を助け出す為にスペースシャトルがやって来た私達は急いでそれに乗り込んだ

……でも……父は……他の人達を先に乗せる為に……自らが彼等の……盾になつて……殺された……

うつ……うぐつ……ひつく……

私と母は……父を残して自分達だけ……ううう……」

円堂 「 そんな事が……あつたなんて 」

鬼道 「 辛い思いをしたんだな…… 」

豪炎寺 「何てヤツだ…絶対許せねえ！！」

円堂 「月影、自分を責めちゃダメだ？」

お父さんは自らの命を懸けてまでお前とお母さんを守りたかったんだ、助かって欲しかったんだ？ きっとお父さんはお前が落ち込むのを見たくなんてないはずだ？ そうだろ？

鬼道 「俺もそう思う」

豪炎寺 「ああ？ お前は父親の分まで幸せにならなければだめだ？」

四季菜 「みんな…ありが…と…」

私は涙を拭いた

「でも私は幸せになる事は出来ない…」

豪炎寺 「？ 何故？」

四季菜 「月から逃げ出すあの時…あの男は言ったの——私が15になったら迎えに行くと…」

私はきつと逃げられない…どこにいてもあの男は私を見つけ出す

……

怖いのが…毎日が…こんなに変装して、世界中を逃げ回っていたのに…何をしていてもあの男の言った言葉が頭から離れない…??？」

鬼道 「15になるのは…いつなんだ…？」

四季菜 「あと一ヶ月きつたわ…」

母は今NASAにいるの――

もし月から不穏な動きがあったらすぐに分かるように監視してくれてる

日本ではJAXAの人が見守ってくれてる

でも…それでも怖いの…

だから、私に未来はない、分かったでしょ？

これが本当の私

」

月から来た少女 イナイレ 第四章

く鬼道の気持ちく

俺はコイツを守りたい

胸から熱い何かが込み上げる

何故こんな気持ちになるのだろう

昔の心を閉ざしていた頃の俺に似ているからだろうか

いや、違う

もつと何か

まさか

恋……？

まさか…な

まだ素顔も見えてないっていうのに…ありえない

でもこの気持ちの高ぶりは何なんだー？

く豪炎寺の気持ちく

鬼道がめずらしく動揺している

そういう俺もかなり動揺している

コイツをこれ以上悲しませたくない

何とかして安心させたい

何だろうなこの熱い思い

まさか好き…にでもなつたとか？

まさか

そんな事はないだろ

だが

この胸を締め付けられる感じは何なんだ――

鬼道 「俺がお前を守ってやる…!!」

豪炎寺 「俺も守るぜ…!!」

円堂 「俺達は昔宇宙人と戦った事もあるんだぜ??

月だか何だか知らないけど、絶対にお前の事、守ってみせる…!!

!!

もつと信用しろっつ

俺達を? (ニヒッ)

四季菜 「ありがとう…私…ずっと誰かにそばにいてもらい

たかったのかもしれない…

そばにいる人に…守ってやるって言ってもらいたかったんだ…きつ

と……う、う、うわあああん(大泣く)

四季菜は円堂に抱きついた

鬼： 豪 「?!えっ?」

円堂 「///…えっ?…///あの…ちょっと…///」

「お、俺 こーゆーの慣れてなくてさ、ごめんなっつ (照)」

四季菜 「うっん、いいの、こっちこそゴメンね…」

四季菜は円堂から離れるときちゃんと涙を拭く為に眼鏡を外した

鬼道 （もしや素顔…が…）

豪炎寺 （見える…？）

四季菜は三人に背を向けたまま、こう言った

「私の素顔………見たい？」

円： 鬼： 豪 「あ、ああ、もちろん！！！」

四季菜 「…見せてもいいけど、ひとつだけお願いがあるの
」

鬼道 「何だ？」

四季菜 「私の事……好きにならないって約束して」

円： 鬼： 豪 「……！！！！！！……」

四季菜は三人の方に向き直った

大きく開いた漆黒の瞳 中心は宇宙の青さのように無限の奥深
さがあった

長いまつ毛は瞬きする度にふわっと揺れ、より一層魅力的にするの
であった

バランスのいい鼻、愛らしいピンクの唇

この世の者とは思えない程の美少女だった
美しかった

鬼道も豪炎寺も自分の心がとろとろに溶けていくのを感じた

鬼道 「まさに かぐや姫だな」

豪炎寺 「支配者が狙うのも無理はないな……」

だが四季菜に言われたんだ、惚れるなと……

四季菜は分かっているんだ、自分には男を虜にしてしまう力がある
のだと……

俺達はこの気持ちを抑えなければならない

鬼道 「お前は今日から俺達の……仲間だ……」

豪炎寺 「俺にとってもお前は大事な仲間の一人だ、仲間の
事は必ず守る……」

胸が……締め付け……られる

息をするのが……こんなに……苦しいなんて

だが俺達は……仲間として……お前を守る……！！

月から来た少女 イナイレ 第五章

鬼道 「 月影、悪いが電話を借りるぞ ? 」

四季菜 「 あ、うん、どうぞ? 」

鬼道は別の部屋へ出て行った

円堂 「 月影、良かったら…今から河川敷にサッカーしに行かないか?? 」

「 人生前向いて歩いて行こーぜ ! 」

四季菜 「 うん、そだね… 」

私はまだまだ不安が一杯渦巻いてるけど、でも円堂君達に支えられる事によって新たな一步を踏み出せそうな気がする……

立ち止まっでは…ダメだ…

今を精一杯生きよう

鬼道 「 すまない、待たせたな 」

円堂 「 どこに電話してたんだ? 」

鬼道 「 父さんと話した後 引越し業者にも連絡していた 」

豪炎寺 「 引越し業者 ? 」

鬼道 「あぁ、俺は今日からここに住む？」

四季菜 「?? ええええええっ?? なっ何言ってるの??」

鬼道 「俺は本気だ、一緒に居れば何かあってもすぐに駆けつけられるだろう？」

使っていない部屋もたくさんあるみたいだしな、後で業者が家具を運びに来るから」

四季菜 （さすがは金持ち息子、電話一本でどうとでもなっちゃうのね）（^^;;）
「でもいくらなんでも一つ屋根の下に他人の男女はマズイ…んじやないかな…？」

鬼道 「それは気にするな、何故なら俺とお前は 仲間、なんだろう？（ニヤ）」

四季菜 「何かさっきの事を逆手に取られてるような気がする…////」

でも、きっと何もしないよって…事だよね？

鬼道 「お前達はとうするんだ？」

円堂 「うちは…多分…母ちゃんに許してもらえねえな（^^;; ;」

豪炎寺 「俺も厳しいな…」

鬼道 「そうか、残念だ（ニヤニヤ）」

四季菜 Σ（。A 111）（ だから最後のニヤニヤ何な
んだって……？）

円堂 「鬼道、親父さんに…何て言っただ？」

鬼道 「全力を尽くして守りたいヤツがいるって言ったら理
解してくれた」

今のって…仲間だからって事だよね？

てか私馬鹿なんじゃない？

期待しないでいいように自分から

予防線を張ったのに――

円堂 「よぉ～し、じゃあ 河川敷、行くか？」

四季菜 「行くう？？」 「（変装してかなくっちゃ？）

～河川敷～

円堂 「ようし、月影っ 思いきり俺に向かってシュ
ートして来い！！！！

お前の全てを受け止める　！！」

久しぶりだな、ボールに触れるの…

そうそう、この感覚…

蹴り足に力が宿って行くような、この感じ
右足にどんどんパワーがみなぎってくる

……

今だ　！！！！

ドゴオオオオオオーッ！！！！

円堂　「ゴッド…キャッチ…Gファイ…
うわああああーッっ」

豪炎寺　「なっ？」

鬼道　「ゴッドキャッチが…破られた…だと？」

円堂　「うはっは？　すごい威力だった…
やっぱりお前はスゲーよ！
なあなあ、必殺技とかあんのか？　やっぱり」

四季菜　「必殺技は……ないっ！！」

円堂　ズルッ↑ズッコケた音

「ま、まあいっつか、十分威力あるからな」

鬼道　「次は俺達からボールを奪ってみろ？」

四季菜 「分かった、行くよ？」

豪炎寺が最初にドリブルを始める

四季菜が前をふさぐ

前からボールのある右側へとまわる

豪炎寺 「フツ 甘いな、」

豪炎寺は四季菜と反対側にいる鬼道にパスを繰り出す

豪炎寺 「鬼道？」

ズバッ！！

豪： 鬼 「何イ？」

何と四季菜は瞬時に鬼道のいる方へと移動していたのだ
そして鬼道に渡るはずのパスを見事にカットしていた

鬼道 「もらったー??」

鬼道が素早くスライディングをしてきた

四季菜はギリギリのところまでボールをヒールで跳ね上げ、ヘディングで円堂の前まで来た

胸でボールを拾うと落ちて来たボールにそのまま回転かけシュートの態勢に入った

四季菜 「行くよ？円堂君！」

円堂 「よし！ 来い！」

四季菜は大きく、高く足を振り上げた

そして、大きく蹴り上げた

円堂 「うおおおおー……お？」

円堂は大きく右に飛んでいた

それを見た四季菜はニヤリと笑い軽く左にフェイントを入れた
ボールはゴールへと静かに入って行った

円： 鬼： 豪 「参りました？」

四季菜 「宇宙人をなめんじゃないよ？（笑）」

鬼道 「じゃあそろそろ、俺達は帰るぞ、家具が来るからな
行くぞ、月影っ」

円堂 「楽しかったな、またサッカーやろうな？ 月影??？」
「」

豪炎寺 「変なコト、すんなよな／＼／＼？」

四季菜 「だっ大丈夫だからっ／＼／＼じゃあね」

四季菜と鬼道は四季菜の家に向かって歩き出した

何か不思議

守ってくれる人がそばにいただけで

こんなにも落ち着くなんて

何年振りだろう、この安心感

不安が全部消える事はないけど

氷の世界に突然現われた小さな炎

世界を溶かせるワケではないけど

近くに居ればあたたまる

例えていうならそんな感じ

ありがとう、鬼道君、

背中が頼もしく見えるよ

月から来た少女 イナイレ 第六章

「四季菜の家」

リビングのダイニングに座る四季菜とはす向かいのソファに座る鬼道

四季菜 「ホントにここに住むつもり？」

鬼道 「でなければ今ここにいないさ」

♪ ピンポン ♪
業者 「。。。運送です？」

鬼道 「来たな！ ガチャッ

ご苦労様、案内する部屋に運んでくれ」

四季菜 「……………つつ？」

私の隣の部屋？ 奥の部屋の方が広いつて？」

鬼道 「何かあった時すぐに駆けつけなければ意味が無いだろう？」

四季菜 「それは…そうだけど… （寝る時も薄壁一枚だけなんて… / / / / 意識しちゃうじゃない / / / / /

…）
っていうか、ベッドでかつ？ ……もしかキングサイズ…？」

鬼道 「当たり前だ、何か可笑しいか？」

四季菜 「（^^;;」

いえ、何も……」

運ばれたのは馬鹿でかいベッド、クローゼット一式、勉強机、書庫などだった

へえ

インターネットで済まさず、きちんと本を読む人なんだ
さすがは学年トップ

引越しの片付けが終わった

鬼道 「こんなに遅くなってしまったな、
何か飯でも作るか？」

四季菜 「あ、私が作るよ！
（一応女の子だし）
鬼道君はお風呂でも入って来て」

鬼道 「…ならその言葉に甘えて遠慮なく」

鬼道は身支度を済ませるとバスルームへ向かって行った

四季菜 「よし、あとサラダを盛り付ければ出来上がり」

♪ ピーンポーン ♪

こんな夜遅く誰だろう？

四季菜はインターホンの受話器を取った

四季菜 「…はい、どちら様ですか？」

豪炎寺 「……俺だ……」

四季菜 「豪炎寺君？？」 あ…今開けるからちょっと待ってて？」

豪炎寺 「ああ、」

四季菜は玄関のドアを開けた ガチャッ

目の前には大きなスポーツバッグを持った豪炎寺がいた
ジャージから着替えてきたらしく私服の白パーカーにオレンジの上着を羽織っていた

シャワーも浴びて来たのだろう、栗色の髪は少し濡れており、外の風に乗ってシャンプーのいい香りがしていた

四季菜 （私服姿もやっぱりカッコいい……さすがは学年一のもテ男／／／／）

「どうしたの？ こんなに夜遅く……それに、その荷物は？」

豪炎寺 「……その…俺もここに住む…から……」

豪炎寺は顔を赤らめて言った

四季菜 「／／／／えっ、えっ？ 何で豪炎寺君まで
？ いいって！！マジで！！」

豪炎寺 「俺はお前を守ると決めた、これは俺の気持ちの問題なんだ！」
邪魔するぜ？」

豪炎寺は勝手に靴を脱いでリビングまでスタスタ歩いて行った

四季菜 （ここ……私の家なんですけど……（^^;;）
勝手にそーゆーの、きまっちゃうんだ）

豪炎寺は鬼道の向かいの部屋を指差し――

豪炎寺 「この部屋借りるぜ？ 寝床はリビングのソ

ファでいいから……

お前、飯作ってたのか？」

四季菜 「あ、うん、 豪炎寺君はご飯食べた？」

「

豪炎寺 「ああ、食って来た

でもお前の飯、うまそうだな、少しもらっていいか？」

四季菜はすごく嬉しくなった

料理を人の為に作ったのは初めてだった

ご飯を食べて来たにも関わらず 豪炎寺は食べたいと言ってくれたのだ

四季菜 「じゃあ、あとサラダを盛り付けるだけだから、待ってて？」

豪炎寺 「それだけなら俺がやってやるから着替えてきたらどうだ？」

四季菜 「 ありがとう、優しいんだね、豪炎寺君…」

豪炎寺 「 / / / / 礼を言われる程の事じゃないさ」

四季菜はエプロンを外すと自分の部屋へ入って行った

） 豪炎寺の気持ち ）

女のエプロンって何かいいな…

死んだ母さんを思い出す

やっぱり鬼道と二人暮らしなんてさせられない

彼奴には隠れ悪魔がいるからな

何をしでかすか分からない

支配者からも鬼道からも俺が守らなければ

俺は四季菜を

愛している

その気持ちが確信に変わったのはあいつの
瞳を見た時だ

自分の存在全てがああ宇宙のような瞳の中に吸い込まれてしまった

息が止まるかと思った
それ位、衝撃的だった

あいつが俺のものにならなくてもいい
俺はただ

あいつという存在を守りたい
それだけでーっいいんだ

四季菜 「食べよう」 食べよう」 お腹すいた」 (ハ
○ハ) いったきまあす」

テーブルにはチキンの照焼き、マカロニサラダ、きんぴらごぼう、
ほうれん草の炒め物 などが並ぶ

豪炎寺 「(＊ハ〇ハ＊) 美味しい!!」

鬼道 「ああ、金を払ってもいい位 美味しいぞ」

四季菜 「美味しいなんて言ってもらえたの、初めて…すつこ
く嬉しい！」

豪炎寺 「月影って何でも出来るんだな、苦手なものとかある
のか？」

四季菜 「……………ある…」 (ハハ;;)

鬼道 「何だ、それは？」

四季菜 「歌が…苦手なの…その…音痴で…¥(／／／／)
¥」

鬼道 「歌ってくれないか？ 絶対笑ったりしないから」

テーブルにひじを寄せ組んだ手にあごをのせながら四季菜をじつと
見つめる

豪炎寺 「俺も聴いてみたいな？ 俺からも頼
む 笑ったりしないさ」

しばらく考えてから

四季菜 「…… ちょっとただだよ？ 絶対笑わないですよ？」

鬼： 豪 「ああ？（*^へ^*）」

姿勢を正す

四季菜 「コホン…行きます、私の好きな曲
当ててね？」

こお…うなあ…ゆきい…まあう…きい…せえつはあ…¥（/
／／／）¥ いっ以上です？？」

鬼道 「…… さっぱり分からないな、どうしたらこんなに下手
に唄えるんだ…（汗）」

豪炎寺 「予想越えだったな…（汗）」

四季菜 「笑わないで、とは言ったけどそんなに酷評しなくても
良くない？ グスン（泣）」

レミオロメンの粉雪…だよお（Ｔ ^ ｴ）」

鬼道 「すまない、だが月影はもう歌わない方がいいと思うぞ」

豪炎寺 「同じく」ウンウン、

「何でその曲が好きなんだ？」

少し拗ねた顔をしながら

四季菜 「月には雪なんてなかったから…地球に来て初めて雪

を見て、感動して大好きになったんだ
れだけ！」

そ

四季菜はすごく楽しそうに笑った

く 鬼道の気持ちく

本当に愛らしいな、一言言葉を交わすだけですますます好きになって
行く

今は眼鏡をしていて瞳が見えないけれど
その顔すらとても可愛らしい

俺はお前の虜だ――

誰にも渡したくない
たとえ豪炎寺であろうと
だが自分でも壊したくない
それほどにお前を――
愛してしまっている

まるでかぐや姫――だな
皆かぐや姫の虜になった
だが絶対に月には帰さない
絶対に――までもって見せる

一目姿を見た皇子達は

月から来た少女 イナイレ 第八章

お風呂も入り終わり

四季菜 「じゃ、寝ますか？」

鬼： 豪 「ああ、おやすみ」(風呂上がりの姿めっちゃかわいい／＼／＼／＼！！！！)

豪炎寺 「鬼道、お前のベッド一人で寝るには広過ぎるな、俺も一緒に寝てやるよ」

鬼道 「お前、見張る気だな？」

まあソファじゃかわいそうだからな、じゃ、行くぞ」

四季菜 「あの二人…過ちがなきゃいいけど(・・・；さっ寝よ」

四季菜は久しぶりにグッスリと眠れた隣に異性が寝てる…なんてことも全くお構いなしに――

次の朝

鬼： 豪 「起きろ、月影??」

四季菜 「ふわああ………ってΣ(。A 111)
お、おはようっ」

鬼道 「俺達サッカーの朝練があるから、もう出るぞ？
お前ももう起きないと、遅刻するぞ？」

豪炎寺 「理事長の娘の事は何とかなるから気にするな？」

じゃ、行つて来るな」

四季菜 「あ、ありがとう…行つてらっしゃい（・・）／

」

ふああ… 多分寝顔、ばっちり見られてんだろうなあ（恥）／／

でも何年振りだろう…朝まで一度も目が覚めずに眠れたの
昨日起きた事は夢じゃなかったんだ

友達ができた事

守るって言ってくれた事

側に居てくれる事

なんか、すごく幸せ…

そうだ、昨日疲れちゃってお母さんにメールしてなかった
さっそく報告しなきゃ

男の子と暮らすなんて許してくれるかなあ？

でもお母さんにウソはつきたくない…

正直に言おう

ふとダイニングテーブルに目をやると手作りのお弁当が置いてある
のに気が付いた

中を見てみるとミートボール、ほうれん草とコーンの炒め物、ミニ
トマト、そして少し形のくずれた卵焼きが入っていた

四季菜 「クスツ 頑張って作ってくれたんだ？」
四季菜は目にたくさん涙を浮かべてお弁当を強く抱きしめた

鬼道 「お前、俺と一緒にの事考えてるだろ？」
豪炎寺 「…さあ…？」
鬼道 「フツまあいい…」

まるで天使みたいだった——あいつの寝顔——

一時限目のチャイム♪キーンコーン♪

先生 「月影はまだ来てないのか？ 誰か知ってる者いるか？」
鬼道 「先生すいません、月影から今日は遅れるって連絡を預かっていたのに僕が伝え忘れていました」

先生 「そうか、ならいい、分かった
では授業
を始めるぞ」

豪炎寺 「ボソ…そんな事言ってなかったぞ」
鬼道 「ああ、何しているんだ？あいつ…」

「授業の終わり頃」
ガラガラッ

四季菜 「 すいません、遅れましたハアハア…」
先生 「 連絡は来てたんだからそんなに焦らなくてもいいぞ
席につきなさい」

四季菜が席につくと

鬼道 「 ボソ…あまり心配させるな」

豪炎寺 「 ボソ…何かあったのかと思って 生きた心地がしな
かったぞ」

四季菜 「 ……」、「ごめんなさい…／＼／」

本気で心配してくれて…何か嬉しい

「休み時間」

鬼道 「 何故遅れた？」

四季菜 「 昨日の事を母にメールしてたら時間かかったって…」

豪炎寺 「 ……で、どこまで報告したんだ？」

四季菜 「 ……全部…」

鬼：豪 「ぜ…全部？」

豪炎寺 「おふくろさん、何て？」

四季菜 「大丈夫だった…家に二人も男の子がいるからな鬼に金棒ね、つて」

豪炎寺 「鬼はお前だな…クスッ」

鬼道 「（怒）ずいぶん物分かりがいいんだな」

四季菜 「…それと…」

鬼道 「何だ？」

四季菜 「…その…」

豪炎寺 「（「ハ」）…だから何だ？」

四季菜 「これは大事な事だから必らず言うようにって念を押さ
れたんだけど……
H禁止だつて／／／／？」

鬼：豪 「／／／／！！！？／／／／」

鬼道 「あつ当たり前だ？ 俺達は仲間なんだから？」

豪炎寺 「そっそっそっ？」

四季菜 「そっそっだよね？私もそう言ったんだけど……何せこ

の事をちゃんと言つのを条件に同居を認めるって言つから……ごめんね、忘れて」

円堂 「月影っ」

四季菜 「円堂君、昨日はどうもありがとう」

円堂 「何で鬼道も豪炎寺も顔が赤いんだ？
あつそれより夏未に話したんだ、大丈夫、信頼出来るヤツだからさ、
ボソ…経歴が違つのも納得してもらえたから」

四季菜 「ありがとう…円堂君 おかげで退学にならずにすんだよ」

鬼道 「彼氏の頼みなら夏未も断れないよね？（ニヤ）」

四季菜 「円堂君、そうだったの？（「」） ヒューヒュー」

円堂 「／／／ 何だよ？鬼道？ 俺と夏未はそんなんじゃないって¥（／／／／）¥」

「で、月影、サッカー部入らないか？今日から」

四季菜 「でも他の事情を知らない人に色々取り繕つのも大変だから…部活は遠慮しく

また昨日みたいに時々相手してくれればそれでいいからさ、」

円堂 「分かった、何かあったらすぐ言えよ」

四季菜 「 ありがとう 」

円堂は自分の席に戻って行った

四季菜 「 鬼道君、豪炎寺君、 」

鬼： 豪 「 何だ？ 」

四季菜 「 お弁当、ありがとう 」 卯焼きはどっちが作ったの？ 」

豪炎寺 「 鬼道だよ、俺ならもつと上手く作れる

俺がやるって言ってるのにこいつ、自分でやるって聞かなくてさ よっぽど四季菜に食べてもらいたいみ

たいだぜ 」

四季菜 (^^;; (何か黒い星が出てるような...) 「 鬼道君、頑張ったんだね？ ありがとうね 」

鬼道 「 卯焼きつてのを一度作ってみたかったただ、勘違いするな... 」

四季菜 「 分かってますって (^O^ カワイイ) でもさ、お弁当三つ作ったって事はみんな一緒のおかずなんだよね？ 」

豪炎寺 「 ああ、 」

四季菜 「 私は一緒に食べないからいいけど二人は何故おかずが一緒なの？ ってなるんじゃない？ 」

鬼道 「実はそれを狙って作った」

豪： 四 「どういう事？」

鬼道 「俺達にフラグがたてばやかましい女子が寄って来なくなるだろう？ 言わば虫除け……だ」

豪炎寺 「だからって鬼道と俺かよ、せめて風丸とにして欲しかった

ま、俺も虫除けはしたかったんだ、その話、乗るぜ」

四季菜 「モテ男はすごいなあ……」

〽夜 六時 〽

鬼： 豪 「ただいまあ……」

四季菜 「おかえり〽 部活お疲れ様、ご飯にする？ お風呂にする？」

髪を下ろしている、眼鏡も外している
な、なんて可愛いんだっ！！

ぎゅう／＼／

豪炎寺 「… 鬼道、お前、何で四季菜に抱きついてんだ…？」

鬼道 「… だだいまの… ハグだ… ただの」

俺とした事が… うっかり抱きついてしまうとは…

鬼道 「／／／ 風呂にする 練習で体が火照ってるから、早くシャワーを浴びたい」

四季菜 「／／／ 分かった ／／／」

四季菜まで赤くなってんじゃねーか…
くそつ 鬼道のヤツ…
今まで以上に要注意だ

豪炎寺 「俺も一緒にシャワー浴びるかな、じゃ、行こうか、鬼道くん？」

鬼道 （豪炎寺のヤツ、相当怒ってるな（^^；；）

ゝ バスルーム ゝ

体を洗いながら

鬼道 「… 何だよ？ まださっきの事怒ってるのか？」

湯舟に浸かりながら

豪炎寺 「当たり前だ、月影が勘違いしたらどうする？」

鬼道 「俺の方に向けてくれたらそれに越した事はない」

豪炎寺 「あいつは自分の誕生日までのカウントダウンに毎日怯えているんだ、今は恋愛どころじゃない、お前だつて分かつてるだらう？
今はちょっかいを出すべきじゃない」

鬼道 「……そうだな、分かった…気を付けるよ」

豪炎寺… お前も相当月影に本気なんだな

） リビングにて ）

鬼道 「今日の飯も美味かったぞ、ごちそうさま、洗い物は俺達がやるから」

豪炎寺 「月影はゆつくりしてくれ」

四季菜 「じゃあ私みんなの洗濯物しまつて来ちゃうね？」

豪炎寺 「そんなの後で自分達がやるからいいぞ、少しは休んでるよ？」

四季菜 「私 何もしないのって苦手なの、一分一秒でも時間がもったいなくて…だから、しまつて来る」

豪炎寺 「あ、ああ」

一分一秒でも…か、いつも気が安まらないんだな
かわいそうに

洗い物も終わり、三人はソファでくつろぎながら話しをしていた
二人がけのソファに鬼道と豪炎寺、一人椅子に四季菜

四季菜 「フラグは作戦通り立ったの？…クスッ」

ブラックコーヒーを飲みながら

鬼道 「一気に広まったよ、俺達への注目度はハンパないな」

カフェオレを飲みながら

豪炎寺 「だめ押しに帰り鬼道と手をつないで帰ってやった 女
共が一気にさくっと引いて行ったな、あれは愉快だった」

ミルクティーを飲みながら

四季菜 「本当にそれでいいんですか？…あなた達…（^^;;」

「

鬼道 「何言ってた？ その方が月影だって他の女に嫉妬
されなくて済むだろ？」

もしかして、私のため？だとしたらそこまでしてくれるなんて…め
ちゃくちゃ嬉しいんですけど…

四季菜 「二人ともありがと…大々好き??」

四季菜は二人に抱き付いた

鬼： 豪 「 / / ……!!」

四季菜 「 やっぱ仲間って…サイコーだねっ ♪ 」

鬼： 豪炎寺 「 ん、ああ… 」

ああ、なんていい香りがするんだ、俺達と同じシャンプーを使っているはずなのにさらにいい香りがしてくる

／／／／　　ぎゅうううっ　　／／／／

二人はここぞとばかりに四季菜を強く抱きしめた

四季菜 「 バタバタッ！　　苦しいよお…二人ともっっ 」

鬼： 豪 「 ゴメン…　　／／／　（満足気） 」

豪炎寺 「 明日は久しぶりの休みだな、練習もないし、どこか行かないか？ 」

四季菜 「 私はちよつと用事が…」

鬼道 「 何？　　どこに行くつもりだ？ 」

四季菜 「 午前中は美容院に行ってこようと思って 」

豪炎寺 「 ……その髪…切るのか？ 」

四季菜 「 うん、バツサリと 」

鬼道 「 そんなに綺麗な髪、切るの勿体無いな、何故切るんだ

？」

四季菜 「この髪は地球に来てから伸ばし始めたの…言わば生きる氣力を失くしてた私の象徴みたいなもの…」

でもあなた達が私に生きる力を与えてくれた、だからバツサリ切つて気持ちを新たにしたいの」

鬼道 「……なら反対は出来ないな、フツ」

豪炎寺 「午後も用事があるのか？」

四季菜 「学校からの帰り道 街を見渡せるちょっとした丘を見つけたの、そこに行つて風景画を描こうと思つて」

鬼道 「…公園を通り過ぎた辺りか？」

四季菜 「そう、そこ？」

豪炎寺 「フツ 街を見渡したいならもつといい場所があるぜ」

四季菜 「本当？ どこか教えて？」

豪炎寺 「明日連れてつてやるよ、鬼道も行くか？」

鬼道 「俺はいい、明日は自分の好きな事をするさ、」

豪炎寺 お前が月影と二人になつても大丈夫か、試す

鬼道、俺を試す気か…？

四季菜 「じゃあ明日美容院が終わったら一回帰って来るね？」

豪炎寺 「ああ、待ってる」

月から来た少女 イナイレ 第九章

「 次の日 」

四季菜 「 行つて来ます 」

鬼： 豪 「 いつてらっしゃい 」

豪炎寺 「 鬼道今日はどうするんだ？ 」

鬼道 「 久しぶりに帝国の奴等と会つてくる
あと親父の所にも寄つてくる 帰りは多分遅くなるから
飯はいいぞ 」

豪炎寺 「 分かった、不動達によろしくな 」

四季菜 「 ただいまあ 」

豪炎寺 「 おかえり… なんだ、髪切つて来なかったのか
？ 」

四季菜 「 眼鏡を外さないと前髪や横が切れないって言われちゃ
つて…… やっぱいいですって断つて来ちゃったっ？ 」

せっかく意気込んで行つたのに…バカだよね、私…」

豪炎寺 「……………しょうがない、俺が切つてやる」

四季菜 「豪炎寺君が？」

豪炎寺 「これでも昔は夕香によくやってたんだ
大丈夫、変な風にしないから」

四季菜 「じゃあ、お願いするね」

四季菜達はリビングの床に新聞紙を何枚も広げた、大きめのゴミ袋を首の部分だけ切り取ると四季菜は眼鏡を外しそれを頭から被ったひいた新聞紙の真ん中に台と椅子を二つ置くと前に四季菜が座り後ろに豪炎寺が座った

豪炎寺はまず四季菜の腰まである髪をそつと右手の人差し指でなぞつた

そして指と指の間に髪の毛を挟んで手ぐしをとかした

四季菜 「ドキッ…」

豪炎寺君に髪を触られるなんて…なんかドキドキしちゃう…

豪炎寺は左手に髪全体を持ち替えると右手に持った霧吹きの水を髪に吹き掛けた

髪全体が濡れると霧吹きを台に置き、ハサミを手に持った

豪炎寺 「じゃあ、切るぞ」

四季菜 「はいっ！」

ジャキ、ジヨキジヨキ……ジャキ…

あっという間に髪の長さが肩の上までになった

被っているビニール袋を滑り落ち大量の髪は新聞紙に広がった

豪炎寺 「ここから揃えていくぞ？」

四季菜 「はいっ」

豪炎寺は櫛を手にとった

そして器用に櫛で毛先をとかしながらハサミで整えていった

四季菜 「すごい、豪炎寺君、上手だね」

やがて後ろが終わると横に椅子を移動して座り直した

四季菜はすぐ横に豪炎寺の視線を感じ、恥ずかしくて目を閉じた

恥ずかしかったのは豪炎寺も同じだった

四季菜が目を閉じているのをいい事に四季菜の長いまつ毛やツンと伸びた小さい鼻、桜色の唇、同じ色した頬に見とれていた

豪炎寺 「よし、あとは前髪だけだな」

そう言うとは今度は椅子を四季菜の前に移動した

四季菜は目をつむったままだった

チヨキ…チヨキチヨキ…

豪炎寺と四季菜の顔の距離が数センチしかなかった

お互いの呼吸の音が聞こえる

その音がより一層二人を緊張させた

ダメだ……もうガマン出来ねえ……

豪炎寺 「 ……キス……してもいいか……？」

四季菜はビックリした様子で目を開けた
すぐ前には豪炎寺の顔が近くに見えた

四季菜 「 ……いい……よ……」 顔がみるみる赤くなっていくのが分かった
恥ずかしくて目を閉じた

豪炎寺の唇が四季菜の唇にそつと重なった

二人は身体が溶けて行くような感覚におそわれた
自分の体温が上がっていくのが分かった

長い時間……そのままだった

やがて豪炎寺は唇を離れた
離す瞬間 チュツと少しだけ音が鳴った

豪炎寺 「 月影、俺はお前の事が……好……」

言いかけた豪炎寺の唇に四季菜が人差し指を当てた

四季菜 「 それ以上は……言わないで……」

四季菜は悲しそうな笑顔で言った

何故だ――

だったら何故キスさせたんだ？

俺がそんなにモノ欲しそうな顔をしていたのか――？

お前に答えを求める事は出来ないのか――

豪炎寺 「……………分かった……………」

聞きたい事はたくさんあるのにこう答えるのが精一杯だった

ごめん、豪炎寺君…今の私はあなたの期待に応えられない――
キスなんてしなければ――

でもあの時――

私もキスしたい気持ちを抑えられなかった

矛盾してるよね――？

ほんと ごめん――

二人は無言のまま片付けた

〃 帝国学園 〃

佐久間　「鬼道　？　鬼道じゃないか　？」

源田　「久しぶりだな、元気だったか？」

不動　「よう、鬼道くん、今日は何しに来たんだ　？」

鬼道　「お前達　明日は木戸川清修とここで練習試合だろう？
言わば陣中見舞いってとこだ」

不動　「わざわざそんな来なくたって
木戸川なんか俺達の相手じゃねーっての」

鬼道　「フッ　　あまり相手を見くびらない方がいいぞ、
不動、あの三兄弟は新たな技を身につけたらしいからな」

辺見　「なら練習に参加してくれるか？」

鬼道　「ああ、そのつもりで来た」

　　〃 四季菜の部屋 〃

コンコン　　（ドアのノック音）

豪炎寺　「風景画、描きに行くのか？」

四季菜 「う、うん……案内してくれる？」

ドア越しに会話する二人

豪炎寺 「じゃあ後10分位で出るぞ？」

四季菜 「…分かった」

四季菜はその間に急いでおにぎりをにぎった

豪炎寺が部屋から出て来た

豪炎寺 「行くぞ」

四季菜 「うん」

歩きながら――

豪炎寺 「荷物それだけでいいのか？」

四季菜 「今日は鉛筆書きのスケッチしかないから」

豪炎寺 「そっちの荷物はなんだ？」

四季菜 「おにぎり作って来た、着いたら食べよ」

豪炎寺 （10分しかなかったのに急いでにぎってくれたんだ、
ありがたいな）

20分後、二人は鉄塔広場に着いた

豪炎寺 「どうだ？ここから眺める景色は？」

四季菜 「すごい？ 街全体見渡せるじゃん！
とう、豪炎寺君！」

豪炎寺 「そんなに喜んでくれるとはね、連れて来て正解だったな」

四季菜 「あそこのベンチでおにぎり食べよう」

豪： 四 「いただきまーす」

豪炎寺 「モグモグ……うん、美味しい！」

四季菜 「良かった、いっぱい食べてね？飲み物はここに置いとくよ」

豪炎寺 じーーーーっ

四季菜 「なっなに見てんの？ / / /」

豪炎寺 「やっぱりお前が好きだわ」

四季菜 「あーっ？ 言っただけ？
言わないでって言ったんじゃない？」

豪炎寺 「もう分かっている事なんだから、口に出したって出さな

くたつて一緒だろ？

それにお前が応えられないのも分かるからさ、気にしないでいいよ？」

四季菜 「…私の気持ち、分かってくれるの？」

四季菜の頭をそつと撫でて

豪炎寺 「ああ、」

四季菜は申し訳なさそうにおにぎりを食べた

四季菜 「さあて、じゃあ描こうかな

豪炎寺君はどうするの？」

豪炎寺 「俺はここで特訓する（ニコッ）」

豪炎寺はそう言うって持って来たサッカーボールを出した

そして大きな木の下に行くとその木の枝にロープで結び付けてある大きなタイヤに手を置いた

豪炎寺はタイヤから少し離れるとタイヤの穴目がけてボールを力強く蹴り上げた

ドガアアアアアッ

サッカーボールはタイヤの穴を通り向こう側の木に跳ね返って豪炎

寺の元まで戻って来た

四季菜 「すっすごい！！タイヤの穴を通すのだって至難の技なのに、その通ったはずのタイヤが全く揺れていないなんて……
豪炎寺君、やっぱりあなたは天才ストライカーね！！」

遠くから

「おおーい！！」

円堂が階段をのぼって二人の所まで走って来た

円堂 「なんだ、ここにいたのか、搜したよ」

豪炎寺 「どうしたんだ？ 円堂」

円堂 「せっかくの休みだから月影とサッカーしたいと思ってさ

家にも行っただし、河川敷にも行っただぜ？

月影、サッカーやろうぜ？」

四季菜 （^^;; 夏末さんとデートとかしないんだ……

さすがサッカー馬鹿だな）

「うん、」

円堂 「豪炎寺、さっきの見たぞ、やっぱりスゴいなあお前、タイヤに全く触れずにボールを通すなんて！！

そっだ！ 月影もやってみたらどうだ？」

四季菜 「うん、面白そう、やってみる」

四季菜はボールをタイヤの数メートル前に置くと右足のつま先で軽く触れてボールに回転をかけた
そのまま勢いよく蹴り込んだ

ズバアアアーツ！

だがボールはタイヤの穴の中心を少し外してしまった
タイヤのへりにボールは勢いよく当たるとさらに加速して四季菜の方に跳ね返って来た

四季菜 「しまった ！！ こっちに戻って来る？」

豪炎寺 「?? このままじゃあいつの顔に当たる ???」

その時だった

円堂 「ハアアアアーツ！！ ゴッドハンドツツ ！！」

ピシュウーウーウウ……

ボールは円堂の手の中におさまった

四季菜 「……！！……すごい……こんな一瞬の間に力を最大限に出せるなんて……」

四季菜は世界一のゴールキーパーとエースストライカーの凄みを改めて感じさせられた

四季菜 「参りましたっつ？」

円： 豪 「地球人をなめんなよ？（笑）」

四季菜はその後風景画をスケッチし、円堂と豪炎寺はシユートとキヤツチの練習をした

三人とも日が暮れるまで夢中で続けた

円堂「じゃあそろそろ、帰ろうか？

あれ、月影、髪切った？」

四季菜「（^^;; 今聞く？）今日豪炎寺君に切ってもらったの、どう？上手でしょ？」

円堂「ああ、豪炎寺はほんとに器用だな、月影、その髪型、似合ってるぞ（ニカッ）」

四季菜「ありがとう…」

四季菜はまたキスの事を思い出してしまい、顔を赤らめた
だか夕陽のおかげで二人には気付かれなかった

四季菜「豪炎寺君、ご飯 何食べたい？」

円堂「なんだ、豪炎寺 月影の家で飯食ってくのか？」

豪炎寺「一緒に住んでるからな」

円堂「え〜っつ？ マジ〜？ 鬼道だけじゃなかったのかよ？」

豪炎寺 「鬼道だけじゃ何するか分からないからな？」

(俺の方が何かしちやっただけ……)

円堂 「？ 何するかって、何を？」

豪炎寺 「相変わらず鈍いやツだな、鬼道が月影に手を出したらどうするって事だよ？」

円堂 「……／／／ア、アハハハ……／／／意味分かった……でもまだ中学生だぜ？そんな事しないよ？」

豪炎寺 「こう言っちゃなんだが、鬼道も俺もとつくに……ハッ？」

円堂 「とつくに……何だよ？」

豪炎寺 「……¥(／／／)¥……いや、何でもない」
(月影が側にいるの忘れてた)

四季菜 (オトナになっちゃってるのね……(^^;))

鬼道も俺も言いよって来た女を幾つかつまみ食いした事がある
最初の相手もそうだった二年の時、一つ上の先輩だった
俺にとつては初めての相手なんてどうでも良かった
ただ早く童貞を捨てたかっただけだった
鬼道もおそらくそうだろう

だが自分の好きになった女には俺が初めてで居て欲しい

ワガママかもしれないけど、そうなんだー

月影――お前は――どうなんだ――？

月から来た少女 イナイレ 第十章

円： 豪： 四 「いただきますあす ♪」

円堂 「この唐揚げつつま ♪ 美味いよ、月影」

四季菜 「良かった、おかわりたくさんあるから遠慮しないで食べてね」

たくさんあつたはずのご飯はあっという間に無くなった

円堂は予想以上に食べた

円堂 「あゝ？ お腹いっぱい？ ご馳走様？

豪炎寺も鬼道もいいよな、こんなに美味しい飯が毎日食えるなんてさ、
」

豪炎寺 「フツ 何言ってたんだ、お前のおふくろさんの料理だつて十分美味しいじゃないか？」

円堂 「まあそうなんだけどな、ニヒヒ…」

「よし、これで明日の休日特訓も頑張れるな！！
月影、明日練習してるとこ、見に来ないか？」

四季菜 「私は今日描いたデッサンに色入れをしたいから遠慮しとくね、多分今日の夜からアトリエにこもるから」

鬼道 「ただいまあ…」

円：豪：四 「おかえりい！！」

鬼道 「なんだ、円堂来てたのか？」

円堂 「昼間鉄塔広場で会ったんだ、で遅くまで居たからそのまま夕食の招待をうけてさ」

鬼道 「…そうか、

？…月影ずいぶん短くしたな？」

四季菜 「……どうかな？」

円堂 「豪炎寺が切ったんだってさ」

鬼道 「ほう、豪炎寺が……ふーん、まあ似合ってるんじゃないか？」

四季菜 （^^;; 何この見透かしたような顔）

円堂 「じゃあ俺、そろそろ帰るわ、お前らまた明日な月影、ご飯ご馳走さんな」

鬼：豪 「明日な？」

四季菜 「私じゃあ、先にお風呂入って来ちゃうね？」

鬼：豪 「ああ、」

ボタン、パタパタ……四季菜はバスルームへ行った

鬼道 「お前、あいつの髪切ってやったただけか？」

豪炎寺 「フツ…他に何かある？」

鬼道 「フンッ まともに答えられないのが何よりの証拠だな、抑えがきかないのはお前の方じゃないのか？」

豪炎寺 「実はキスして告白した」

鬼道 「やっぱりだな、で？月影は何て？」

豪炎寺 「俺の気持ちには応えられないってき、何でキスさせてくれたのかは知らないがな……」

鬼道 「そうか……」

あいつもキスしたくなったのかもしれないな、きっと……」

四季菜がアトリエにこもってから六時間が経とうとしていた

四季菜 「ふう、もう三時か、少し休もうかな、」

四季菜はアトリエにあるソファに座りひじ掛けに横になった
両手は汚れているので前に垂らしていた

「少しだけ……」

四季菜はうとうとし始めた……

夢を見ていた

やさしい顔をした父親が四季菜に向かって両手を広げてくる

父親 「 四季菜…こっちにおいで…」

四季菜 「 お父さん…!!」

四季菜は一生懸命走って父親の腕に抱かれる

次の瞬間――

父親の体中のあちこちから大量の血が吹き出してくる

父親の表情はみるみる歪み始め、ゾンビのような顔になってゆく

四季菜 「 きゃああああーっ??？」

四季菜に大量の血が降りかかる

「 お父さんっつ!!!!」

四季菜は目を覚ました

目の前にはアトリエが広がっている

四季菜 「 …お父さん…また、この夢…」

四季菜はいつもこの夢にうなされていた

絶対彼奴を許さない――あんな人殺しがのうのと別世界で生き
ているなんて――

許されるはずがない

どうしようも無くなつた時には

私が彼奴を

名月 静二を

殺してやる――

四季菜は覚悟を決めていた

二時間程しか眠っていなかったが四季菜は寝るのをやめた
今すぐ眠ってもまた夢の続きを見そうな気がしたからだ

そうだ、お弁当作ろう

四季菜は手を洗った

く 朝 六時 く

ピピピピー

目覚ましが鳴った

鬼道が止める

鬼道 「起きろ 豪炎寺、朝だぞ」

豪炎寺 「んっ？……ああ……」

二人とも寝起きがいいのですぐ起きた

着替えて部屋から出るとダイニングテーブルに目が行った

鬼道 「弁当がある」

豪炎寺 「ありがたいな」

二人は四季菜にお礼を言いたくて四季菜の部屋をノックした
返事はない

ドアを開けてみた

四季菜の姿はない

まさかまだアトリエにー？

二人はアトリエのドアを開けてみた

四季菜 「ー？ おはよう？」

四季菜は色をぬっていた

豪炎寺 「まだやっていたのか？」

鬼道 「集中して描き上げたいのは分かるが、あまり無理するな
」

四季菜 「あと少しでやめるから、心配しないで？」

鬼： 豪 「分かった…弁当、ありがとな？」

パタンッ

四季菜は二人が出掛けたのも気にもとめず、ひたすら絵に没頭した

四季菜 「…やったあ、出来たあ……」

四季菜は自分の絵に大満足だった

〔 雷門中サッカー部グラウンド 〕

豪炎寺 「新しい技を覚えられそうなんだ」

円堂 「そうなのか、なら協力するぜ？」

鬼道 「俺達ももっと攻撃の範囲を広げてそれに見合う動きをマスターするぞ！」

闇野： 松野： 穴戸： 半田 「おおっ！！」

風丸 「俺達DF陣も負けてられないぞー！」

栗松： 影野： 壁山 「おおっ！」

豪炎寺 「染岡、俺にシュートを打ってくれないか？」

染岡 「お安い御用だぜ？」

染岡 「行くぞっ？ ワイバーンククラッシュュ！！」
ズガアアアーーーーッッ！！

豪炎寺 「マキシマム……ファイアーッ？」
ズドーーーーッッ！！ シュウウウー……

ボールはゴールを大きく外れて行った

豪炎寺 「 どんどん打ってくれ! 」

染岡 「 ああ、容赦なくバンバン行くぜ! 」

ゝ 休憩時間 ゝ

春菜 「 みなさ〜ん!! 休憩時間で〜す!!
お昼ご飯も食べちゃって下さ〜い!! 」

秋 「 おにぎりもあるわよー! 」

冬花 「 サンドイッチもありますよ〜!! 」

鬼道 「 俺は弁当を持って来たからいい、 」

豪炎寺 「 俺もだ 」

秋 「 またお揃いのお弁当なのかしら? (^^;:~:~:~:」

春菜 「 まさか…お兄ちゃんに限ってそんな… (^^;:~:~:~:」

二人はお弁当のフタを開けた

それぞれ違うおかずが入っていた

ご飯もそぼろ、ピラフと全く別のものが入っていた

秋: 春 「 ホッ… 」

鬼：豪 「あいつ…フッ」

鬼：豪 「ただいまあー！」

シー—ン

鬼：豪 「？」

リビングに入るとソファで四季菜がうたた寝をしていた
キッチンにはシチューらしきものが煮込んであった

豪炎寺 「火をかけっぱなしじゃないか？
危ないな」

豪炎寺は急いで火を止めた

鬼道 「フッ だから心配してしまうんだ」

鬼道は四季菜の隣りに座った

そして四季菜の頬を人差し指でそっと撫でた

豪炎寺 「……鬼道 ！！？」

鬼道 「はいはい、分かったよ」

鬼道と豪炎寺はバスルームへ向かった

何だか顔がくすぐったい――

四季菜は目を覚ました

目の前に鬼道と豪炎寺の顔があった

鬼道と豪炎寺は四季菜を挟むようにソファに座っており、お互いの手で四季菜の頬を触っていた

四季菜 「¥（／／／／）¥……な、何ですか？…」

四季菜は二人から離れた

鬼道 「お前の肌って赤ちゃんみたいだな？」

豪炎寺 「触ってて気持ち良かったぞ」

四季菜 「人が寝てる時に触って来るなんて、ヒドい！／／／／／」

鬼道 「起きてる時ならいいのか？」

四季菜 「そ、…そういうワケじゃ……／／／」

鬼道 「火をかけっぱなしで寝ていたお前が悪い、さ、飯食うぞ？」

四季菜 「『じ…ごめん…』」

どうしようー
どんどん二人の事
好きになりそうー
ヤバイ
抑えなきゃー

鬼道 「パク…
それで、絵は完成したのか？」

四季菜 「うん…それでね、今回はコンクールに出してみようと思うの…」

豪炎寺 「いいじゃないか、
お前、少しずつ…変わっていつてるんだな…
安心したよ」

四季菜 「パク…
二人こそ、今日の練習はどうだったの？」

鬼道 「俺はもっと攻守の範囲を広げられるように瞬発力の練習を多めにしたかな？
豪炎寺は新たな必殺技が完成しそうなんだろう？」

豪炎寺 「今日は染岡に相当シュートを打ってもらってシュートチェインで出す練習をしたんだが、何か、物足りなくてなかなかゴールに入らないんだ、何が物足りないのかまだ良く分からないんだ

が、……」

四季菜 「……………そのボールが入らない時はどの方向に跳んで行
つてる？」

豪炎寺 「？ ……二時の方向ばかりが多いかな？

何かあるのか？ モグモグ……」

四季菜 「回転がかかり過ぎているのかも知れないわね………良か
つたら明日朝早く私と練習してみる？」

豪炎寺 「あ？ ああ
」

四季菜 「じゃあ六時に家を出るよ！」

鬼道 「何か考えがありそうだな……？」

また夢を見ていた

父親 「四季菜、こっちにおいで！」

四季菜 「お父さん！！」

ブシャアアアアー

四季菜 「ひっ？ いやああーッ！ お父さん？」

鬼道 「おいっ！すっかりしろっ！月影っっ！！」

四季菜 「…はっ？…」

鬼道 「どうしたんだ？すごくうなされていたぞ……お父さんって言うていたな、親父さんの夢見たのか？」

鬼道は四季菜のベッドまで様子を見に来ていた

四季菜 「ハア……いつもこの夢見るの……でも何で鬼道君ここに？」

四季菜はベッドから上体を起こすと時計を見た
時計は午前1時になろうとしていた

鬼道 「明日の予習をして起きていたら 隣の部屋からお前のうめき声が聞こえたんでな
様子を見に来たらお前がうなされてたから
……大丈夫か？」

鬼道は四季菜の隣に座った

鬼道はゴーグルを外していた
四季菜は初めて鬼道の瞳を見た

鬼道君でいつも冷静だから青い瞳かと思ってた
こんなに情熱的な赤い瞳だったなんて

四季菜 「
／／／／
ありがとう…もう大丈夫だから」

つーひーぶい

鬼道は震える四季菜を強く抱きしめた

鬼道の吐息が四季菜の肩にかかる

四季菜「……鬼道く……ん？／／／／」

鬼道 「何もしない、お前が眠れるまでこうして抱いてやる、だから安心して寝ろ」

「四季菜……！」

鬼道はそのまま四季菜を優しく倒すと一緒にベッドに入り四季菜と向かい合わせになった

右腕を伸ばすと四季菜の顔の下に置いて腕まくらをした

左足を四季菜の両足に這わせ左手で四季菜の髪を優しく撫でた。何度も何度もリズムを取るように優しく撫でてくれた。

四季菜は右耳に幸せを感じていた

リズム良く撫でてくれる優しい手が耳に少し当たって来るからだった

四季菜は両手を鬼道の胸に当て自分からもう少しくつついた

鬼道は撫でていた髪から四季菜の肩甲骨の辺りまで下がり今度は背中を優しく撫で始めた

四季菜はHな気持ちになんて全くならなかった

夢の中の優しいお父さんに抱かれている気になった

そのまま安心して小さな寝息をたてはじめた

） 鬼道の気持ち ）

かわいそうに、こんなに震えて

こんな広い家で毎日こんな思いをして眠っていたのか

俺が少しでも癒やしてあげられるならそうしてやりたい

お前を幸せにしたい

好きだ――月影四季菜――

お前だけを

愛している――

眠り始めたこいつに

俺は優しくキスをした――

こいつの唇は予想以上に柔らかくて程よい湿り気があった

俺は自分を止められなかった

唇をくつつけては離し、離してはくつつけ、何度も何度もキスをした

クスッ 眠っているんだから、これ位、いいよな？

月から来た少女 イナイレ 第十一章

ぴぴぴぴー

朝五時半の目覚ましが鳴った

豪炎寺「…うん?…」

いつもなら鬼道が止めるのに…

豪炎寺は自分で目覚ましを止めた

おかしいー 鬼道がー 居ない?

まさか…?

豪炎寺は慌ててとび起きた

急いで四季菜の部屋へ行くとノックもせず勢いよくドアを開けた

ガチャッ!

四季菜の狭いベッドには密着した鬼道と四季菜が眠っていた
鬼道は大事そうに四季菜を全身で抱きしめていた
二人の顔の距離は数センチしかなかった

豪炎寺「なっ何してんだっ? / / / 離れろ…っ!」

豪炎寺は鬼道を無理矢理引き離してベッドの下に落とした

ドタンツ！

鬼道 「痛つつ…！ 何だ？…」

豪炎寺 「何だじゃない（怒）鬼道、お前何故この部屋で寝ていたんだ？」

鬼道 「……まあ、それには深い訳があつてだな……（^^；；；」

豪炎寺 「言い訳無用！！ ファイアートルネード！！！」

鬼道 「うわああー」 ドガッ

四季菜 「何…？ …もう、朝からうるさいな…」

（^^；；； 「！！ 鬼道君、ぶっ倒れてるよ、何かあったの？豪炎寺君」

豪炎寺 「まあ、朝練つてとこだ

月影、早く起きろよ？ 6 時に家出るんだろ？」

四季菜 「あ、そうだね？ 急がなきゃ」

鬼道 「……俺はもう少し寝る……歩けないから月影…ベッド借りるぞ…」

四季菜 「（^^；；； ど、どうぞ」

昨日鬼道君と一緒に寝てくれたの、あれは夢だったのかなあ…
そんな事ない、背中を優しくさすってくれてたあの感覚、あれは夢
じゃない…？

おかげで安心して眠れたんだ
ありがとう、鬼道君……

） サッカー部グラウンド ）

四季菜 「 誰かが来たら練習終わりだからね？」

豪炎寺 「 ああ、分かってる 」

四季菜 「 行くよ？豪炎寺君！」

四季菜は回転をかけずに真っ直ぐボールを上蹴り上げた
そのままボールの後を追うように高くジャンプし右足を真っ直ぐ伸
ばすと豪炎寺目がけて思い切りボールを蹴り込んだ

四季菜 「 行っけえーっ！ 」

ドウウーーン ……！！

豪炎寺はボールと同じ速さで走った

ボールと平行に並ぶと左足を高く振り上げた

豪炎寺 「マキシマム…ファイアー…!!」

四季菜 「あれ!? 左足…!?」

ズガアアア…ツッ!!

ボールはあと少しという所でゴールをそれた

豪炎寺 「今の…惜しかったな、」

四季菜 「何もかも分かった、次は決める!!」

四季菜は豪炎寺の利き足は右だとばかり思い込んでいた
だが彼の利き足は左だったのだ

四季菜は微調整をして先程と同じようにボールを蹴り込んだ

四季菜 「今度こそ、行け…!!」

ドウウ…ン!!

豪炎寺 「……マキシマム…ファイアー…!!」

ズバアアア…!!……

ボールは見事ゴールネットを揺らした

四季菜 「 いやったあーっっ!! 」

四季菜は飛び跳ねて喜んだ

豪炎寺 「 …っっ!! 出来た !! 」

ありがとう!! 月影っ お前のおかげだ !! 」

豪炎寺は嬉しさのあまり四季菜に駆け寄ると強く抱き付いて来た

ぎゅっうっうーっっ!!

四季菜 「 / / / / ! 豪炎寺君……誰か来たらマズイよっ
? ……」

四季菜は慌てて豪炎寺から離れようとした

豪炎寺 「 ……ダメだ 」

豪炎寺はその腕を押さえつけて強引にキスをした

四季菜 「 …んぐっ……ん… / / / / 」

四季菜は身体力がだんだん抜けてしまった

四季菜が抵抗出来なくなったのが分かると豪炎寺は両手で四季菜の顔を包みこんで自分の舌を四季菜の口の中へスルリと滑り込ませた

く 豪炎寺の気持ち く

ダメだ…また自分を止められねえ…

鬼道に朝まで抱かれてたなんて

考えただけで頭がどうにかなりそうなんだ

本音はお前を誰にも渡したくない

もつと

もつとお前を感じていたい

くそ…こんなに好きにさせやがって

どうしようー恥ずかしくて…抵抗ー出来ない

学校でこんな事されてるなんて…豪炎寺君…ずるいよお…

四季菜はされるがままだった

／／．．．／／／…はあ…だめ…ん…くちゅ…んあ…／／／

その行為は1分近く続いた

豪炎寺は四季菜を抱きしめながら 遠くに人影が見え始めたのを確認した

豪炎寺は四季菜からゆっくり唇を離した

銀色の糸が引かないように唇が離れる瞬間軽く吸い上げた

豪炎寺 「残念、ここまでか…」

豪炎寺は物足りなさそうに四季菜を見つめていた

豪炎寺 「誰か来始めたぞ、？」

四季菜 「／／／あ、うん……」

四季菜は慌ててグラウンドから出た

しばらく歩くと四季菜は自己嫌悪に陥った

四季菜は学校から出て行った

考えれば考える程 自己嫌悪に陥った

どうしよう、私……サイテーだ

豪炎寺君は何だかんだ言って私に答えを求め始めてる……なのに
ちゃんと応えられないのに……

期待させちゃいけないんだ

私だって期待しちゃいけないんだ

私の人生は

あと少しで終わるかも知れないのだから

♪ キーンコーン ♪

鬼道 「ボソ…何でお前と一緒に家を出たのにここに居ないんだ？」

豪炎寺 「ボソ…途中で別れたからさ、（まさかさっきので来れなくなつたのか…？）」

鬼道 「お前、さては身に覚えがあるだろ？（怒）あとで皇帝ペーシングを食らわせてやる」

豪炎寺 「（^^;;……………」

先生 「今日は月影が休みだな、風邪らしいぞ、お前達も気を付けろよ」

鬼道 「自分で連絡して来たみたいだな

豪炎寺、あとツインブーストも付け加えてやろう…」（ひきつり笑）

豪炎寺 「……………（^^;;…」

放課後 部活を終え

鬼道と豪炎寺は急いで家に帰った

ガチャッ！ 鍵は開いている

鬼道 「月影？」

返事はない

家の中は真っ暗だった

鬼道と豪炎寺はお互い違う部屋を捜した

四季菜はどこにも居なかった

豪炎寺 「俺の……せいか？

惚れるなって言われたのに……惚れたからか？

気にするなって言ったくせに……キスしたからか？」

鬼道 「今はそんな事言っている場合じゃない、とにかく捜すんだ！！」

豪炎寺 「あ、ああ……！！」

鬼道 「もしかしたら……？」

二人は鉄塔広場まで向かった

四季菜はそこにいた

豪炎寺 「月影 っ！！」

二人は四季菜の側まで駆け寄った

豪炎寺 「何やってたんだ？ 心配するじゃないか
！！」

四季菜 「大げさね、景色を見に来てただけよ……」

豪炎寺 「俺のせいで学校、休んだのか？」

四季菜 「勘違いしないで、キスしたくらいでいい気にならない
だよ！

今日は気分が乗らなくて休みたくなっただけ
……あなたとはカンケーないから！！」

豪炎寺 「……………っ！！……」

私、ひどい言い方してる……でもこれでいいんだ

鬼道 「月影っ！ お前、どうしたんだ？」

四季菜 「うるさいっつ！！」

私にはあと二週間しか無いの！！

今は恋なんかしてる暇なんて無いのよ！！

私の事なんかもう、ほっといてっつ！！」

四季菜は走り去ろうとした

「放っておけるか！！」

鬼道は四季菜の腕を引っ張るとそのまま強く抱き締めた

四季菜 「……………？ ……っ
離してっ！ 離してよっ！！」

四季菜は必死に抵抗した

鬼道は体のあちこちを叩かれてもひるむ事なく四季菜をより強く抱き締め続けた

鬼道 「絶対に…離すものか、俺はお前を守ると決めたんだ！」

四季菜 「……………！！！」

四季菜は身体が熱くなり全身から涙が溢れ出そうだった

「……………う、うわぁーん……………！！」

怖い、私すごく怖いの…

助けて、お願い助けてよぉ……………」

四季菜は大声で泣いて鬼道にしがみついた

豪炎寺は見ていた

ただ何も言えずそれを見ていた

そしてその時

鬼道には叶わない……………そう思った

三人は家へ向かって歩いていた

会話は無かった

だが鬼道と四季菜は手を繋いでいた

その何歩か後ろを豪炎寺は歩いていた

四季菜はふと空を見上げた

空には月がのぼっていた

そしてその月は急に強く光り始めた

四季菜 「何……あれ……？」

鬼道も豪炎寺も空を見上げた

月の異常な光り方に鬼道も豪炎寺も気付いた

鬼：豪：四 「——！！！！！！」

月から真っすぐ三人に向かって光が伸びてきた

四季菜は思わず鬼道にしがみついた

パアーーーー……

三人とも目が開けられない程の眩しさを感じた瞬間ーーーー声がした

月から来た少女 イナイレ 第十二章

「久しぶりだな――四季菜――」

四季菜 「…………… その声は――名月 静二 ……！」

四季菜は憎しみの表情で顔を歪ませた

名月 「憶えていてくれたとは光栄だねえ」

眩しさが無くなって目を開けると、鬼道と四季菜の目の前に名月が居た

腰まである漆黒の長い髪、右目は髪の毛で隠れている
切れ長の目には暗黒の世界のような瞳が宿っている
シャープなあごのラインには悪魔のような微笑み
真っ黒な服に身を包んでいた

四季菜 「名月いゝつつ……！」

四季菜は憎しみを込めて叫ぶと名月につかみかかろうとした

鬼道 「よせっ月影……！ それはホログラムだ……！
ヤツは本当はそこに居ない……！虚像だけだ……！」

四季菜は手を伸ばしてみた

名月の体を通り抜け向こう側へ出てしまった

名月 「その通り、私は今そこにいる訳では無い」

「四季菜、さらに美しくなったな？」

その瞳をどんなに隠そうと、私には通用しないぞ

お前は上手く逃げ回っていたつもりのようなが私にはお前がどこにいたのかも全部お見通しだったのさ、ハッハッハ」

鬼道 「あんたが支配者か？ 何のためにこんな事をする？」

名月 「今日は伝えることがあつてね、

フッフッ

四季菜、お前を迎えに行くまであと二週間だ

その時が待ち遠しいよ」

豪炎寺 「誰が渡すものか!!」

名月 「フフ…そう言つてられるのも今のうちだ」

四季菜 「お父さんを……よくも……」

名月 「よくも、何だね？」

四季菜 「よくも…殺したな？ このヤローツ!!」

私は絶対にアンタを許さない!!!」

名月 「ハハハハッツ!!
誰が殺したと言つた？
お前の父親は生きているぞ？」

四季菜 「……嘘をつくなーっ！

私はお母さんと目の前でお父さんがあんた達に殺されていくのを見たんだっ……！」

名月 「なら、これを見てもろ……！」

同じホログラムで四季菜の父親の姿が映し出された

父親はやつれた表情で足かせをつけられ監禁されていた

四季菜 「お父さん？ お父さんっ！お父さんっ！」

四季菜は一生懸命父親に向かって叫んだ

名月 「残念だが、彼にはお前の姿は見えないし聞こえないようにしてある

お前達は死んだと勘違いしていただろうが
実はあの時、まだ息をしていたのだ」

四季菜 「ひどいっ……！ こんな事するなんて……！！」

名月 「彼は大事な人質だ、四季菜、お前が大人しく私の花嫁になれば父親は解放してやろう」

鬼： 豪 「……花嫁……だと？」

四季菜 「私……が？ 花嫁？ そしたらお父さんは……助かるの？」

名月 「ああ、約束しよう」

四季菜 「何故？ 何故私なの？ ！！！」

名月 「フツ…教えてやろう

お前と私は十も違うが、お前の瞳を初めて見た時から――

私はお前の虜になったのだ

私が支配者になったのも全てお前を手に入れる為だったんだ」

四季菜 「あんなにたくさんの方が不幸になったのは全て私のせい…だというの？」

名月 「お前が美し過ぎるからいけないんだ！

さあどうする？父親を助けるか？それともまた、見殺しにするか？ニヤリ」

私のせい…だったなんて

やっぱり私には生きる資格なんてない

でも

お父さんが助かるなら――

私が…

四季菜は覚悟を決めようとしていた

鬼道 「あいにくだが、そうはいかない！」

豪炎寺 「鬼道…？」

鬼道は四季菜を後ろから羽交い締めにし、喉元に小型のナイフをあ

てていた

四季菜 「…………鬼道…君…?…」

鬼道 「今ここで月影を殺して全てを終わりにする」

名月 「なっ…!そんな事お前に出来るわけ無いだろう?」

鬼道 「俺は本気だ……」

鬼道はナイフを押し付けた

四季菜の首からは血がしたたり落ちて来た

四季菜 「うぐっ…!…」

四季菜は苦痛の表情を見せる

名月 「…分かった、ちょっと待て、殺さないでくれ…」

鬼道 「…なら、今から言う条件を呑め」

名月 「…な…何だ?」

鬼道 「二週間後、俺達と雷門中学のサッカーグラウンドで試合をするんだ、お前達が勝ったら月影はくれてやる

だが俺達が勝ったら父親は解放し、月影の事はもちろん諦めてもらう」

名月 「地球人が月の人間に勝てると思うのか?
ハハハハッ どこまでおめでたいんだ、地球人は?

そんな簡単な条件、喜んで引き受けようじゃないか、

鬼道 「約束は必ず守ってもらっぞ?」

名月 「ああ、約束しよう

では、二週間後を楽しみにしているぞ?」

ピカーパーアッー

辺りが異常に眩しくなったかと思うと名月は消えた

豪炎寺 「…消え…た…!」

鬼道は四季菜からナイフを離れた

鬼道 「月影、すまない!こうするしかなかった」

四季菜 「ごほっ! ううん、鬼道君…さすがだったよ?」

豪炎寺 「これで少しは勝算が出て来たな?

鬼道、あの迫真の演技、見事だったぞ」

鬼道 「ああ、月影、大丈夫か?」

四季菜 「少ししか切れてないから大丈夫、」

四季菜はタオルを首にあてた

お父さんは

あの星で生きているー

四季菜は月を見た

月はいつもの姿に戻っていた

鬼道は四季菜の肩を抱えて歩き出した

豪炎寺は二人の後ろ姿を見ていた

豪炎寺 「二人ともすまないが、俺はひと足先に帰る」

鬼道 「ん？ ああ、分かった」

豪炎寺は走って行った

二人は四季菜の家に着いた

電話やメール、FAX音がいくつも鳴り響いていた

四季菜は慌てて電話に出た

母親からだった

母 「もしもし、四季菜？ あなた大丈夫だったの？

月から不穏な動きをとらえたから
急いであなたに電話したんだけど、出なかったから
心配で……………」 お母さん、

四季菜 「私は大丈夫よ、お母さん…
実はね—————」

四季菜はさっきあった事を全て話した

父親が生きていた事

サッカーの試合をする事

二人が守ってくれた事

母 「そう、でもその試合は厳しい戦いになるわね、きっと……
月と地球の人間ではあまりにも身体能力が違い過ぎる」

四季菜 「分かってる、でも私は奇跡を信じるわ、お母さん……私、
必ず勝ってみせるから……!!」

母 「頑張るのよ、四季菜
国家からの要請や下準備はしておくから、
明日、サッカー部に行きなさい
お母さんもあなたの誕生日の前には帰れるようにするから」

四季菜 「分かった、待ってる

お母さん…愛してる…

絶対お父さんを助けようね!!」

母 「 ええ、もちろん!!」

四季菜、私も愛してるわ…」

四季菜は電話を切った

それと同時にさっきまで鳴っていた全ての音は一斉に鳴り止んだ

鬼道 「 どうだった?」

四季菜 「 明日サッカー部に行けば分かるようにしておいてくれるって

鬼道君、豪炎寺君は?」

鬼道 「 それが、こんなものが……」

豪炎寺はそこに居なかった
代わりに置き手紙があつた

＼ 豪炎寺の手紙 ｝

急に居なくなつてすまない

俺は間違っていた

自分の事ばかり考えていた

月影、お前の事を本当に守れるのは俺じゃない

鬼道だ

もちろん月の奴等と試合はする

お前を月には帰さない

明日、学校で会おう

四季菜 「……豪炎寺君…ごめんなさい…」

鬼道 「まだ眠らないのか？」

四季菜は庭に出て縁側に座り月を眺めていた

その目にあの厚底眼鏡はなかった

たとえ庭とはいっても外で眼鏡をかけていないのは初めてだった

鬼道 「フツ…もう眼鏡は必要ないか？」

鬼道は四季菜の隣に座った

四季菜 「もう、隠す事は何も無い
人との関わりを避ける必要も無い

私はありのままで生きて行くって決めたの」

四季菜はそう言って微笑んだ

そして、鬼道の肩に自分の頭を傾けた

鬼道は四季菜の方に斜め下を向いた

そして、ゴーグルを額の上まで引き上げた

鬼道と四季菜は見つめ合った

鬼道は四季菜のほほとあごに右手をそつと添えると軽く持ち上げキスをした

四季菜はそつと目を閉じた

そのまま何度も何度もフレンチキスをした

鬼道は四季菜をお姫様抱っこしてリビングのソファまで連れて行った

ソファに四季菜を寝かせるとその上にゆっくりと馬乗りになった

鬼道 「 傷…痛むか? 」

鬼道は四季菜の首の傷に優しく手で触れた

トクン… 四季菜は自分の心臓が高鳴った

鬼道 「 また血が滲んできてしまったな、絆創膏、貼り直すか? 」

四季菜 「 / / / / このままでいい、ほんと大した事ないから…」

四季菜はもつと鬼道に触れられたいと思っていた
甘えるような眼差しで鬼道を見ていた

鬼道君が今私の上に乗って私を見下ろしている
もつと近くに寄ってほしい

もつと私の事を見つめて欲しい

四季菜は鬼道の左手をつかんだ

鬼道 「クスッ…何だ、もつとこうして居たいのか？」

四季菜 「／／／…うん…鬼道君に…もつと甘えたいの…／
／／／」

大きな目を潤ませて頬を赤らめながら真っ直ぐ自分を見つめてくる
四季菜の姿に鬼道はこの上ない喜びを感じていた

何て可愛いんだ、俺の事をこんなに求めて来るなんて

ああ 俺はもう…我慢の限界だ

鬼道は四季菜の頬に手をあてると髪の毛を指の間に通し頭の後ろま
で手を滑らしていった

四季菜は身を少しよじらせて少しだけ目を伏せた

そしてまた手を頬に戻すと親指だけで四季菜の唇をゆっくりとなぞった

鬼道 「…どこまで、してもいいんだ？」

四季菜はとろけるような視線で答えた

四季菜 「鬼道君の…したいところまで…」

その夜

二人は結ばれた――

月から来た少女 イナイレ 第十三章

有人はすごく優しくてすごく上手だった

初めての相手が有人で良かった

有人……愛してる

お母さん、約束破っちゃって……ごめんなさい……

ピピピピ……

朝の目覚ましが鳴った

二人は四季菜のベッドで寝ていた

鬼道は目覚ましを止めた

四季菜はまだかわいい寝息をたてていた

俺達は昨日 一つになったんだな

四季菜 きれいで可愛かった

お前の初めての相手で良かった
ますますお前の事が愛おしくなる

鬼道 「おはよう、四季菜、朝だぞ」

鬼道は優しく四季菜の髪を撫でた

四季菜 「…ん、…有人…おはよ…」

四季菜は朝日が眩しそうに片目だけ開けて鬼道を見つめた

朝から可愛いな / / / ……チュツ……

鬼道はおはようのキスをした

二人は下着姿だった

鬼道はもう一回抱こうとした

四季菜 「ダメっ！ / / / 時間無くなっちゃうよ？」

鬼道 「……はいはい、（^^）…」

二人は手を繋いで学校まで歩いた

四季菜 「ほんとに、いいの？手を繋いだまま学校の中まで歩いちゃって…」

鬼道 「ああ、逆にお前には俺がいるってアピールしておかないと、悪い虫がたくさん寄って来るからな」

サッカー部グラウンドにはイナズマジャパンのメンバーが揃っていた

佐久間 「来たな？鬼道」

栗末 「隣にいる女の子、誰でヤンス？」

風丸 「／／／．．．．．手を繋いでないか ？／／／」

壁山 「もしかして、鬼道さんの彼女さんツスカね？」

土方 「スゲ〜〜美人だな？」

春菜 「お兄ちゃん……」

不動 「へえ〜 面白いじゃん？」

豪炎寺 「……………」

円堂 「おーい！ 鬼道こっちだーっ！

月影も早く来いよ！」

染岡 「何だ、円堂知ってるのか？」

綱海 「か〜わいい！、早く紹介しろよ？」

木暮 「だから鬼道さんの彼女なんじゃないのかよ？ ウッシ

ッ
ッ
ッ

鬼道 「待たせたな、ここにいるのは月影四季菜、……………コホン、俺の彼女だ」

(宣言してんだから、お前等手を出すなよ)

四季菜 「…………… 月影四季菜です、よろしくお願いします」

吹雪 「キミすごく可愛いね、僕は吹雪士郎、よろしくね？」

鬼道 「……………」
言ってるそばから…
四季菜 「……………」
……………」

久遠監督 「月影四季菜君だね？話は総理大臣から聞いている私は久遠道也、イナズマジャパンの監督だ
月の人間について分かる事があったら何でも教えてくれ」

四季菜 「はい！ よろしくお願いします！」

久遠監督 「お前達に集まってもらったのはほかでもない、13日後に月から来る人間と試合をする為だ、
大体の話は聞いているな？」

今日から合宿を開始して本番までの13日間、練習に励んでもらう

「

不動 「支配者が狙ってるのはその女一人なんだろう？
だからって何で俺等まで借り出されて宇宙人なんかと戦わなきゃならないワケ？」

夏末 「確かに向こうの目的は彼女よ、でも月が占領され続ける以上、人類移住計画を遂行する事は出来ないわ

試合に勝って他の人質を解放しさえすれば名月静二達を捕まえる事が出来る

計画も遂行する事が出来る

言うなれば未来の人類の存亡危機を救う為の試合よ

尚 学校は試合が終わるまでの二週間は休校にして全門を閉鎖していますから

部外者はもちろん入れないし私達ももちろん門の外に出られないからそのつもりでいてね？」

ヒロト 「僕達、すごい任務を背負ってるんだね？」

久遠 「この任務には国連機関も関わっている

反対するものは反逆罪に問われるからそのつもりでいろ、質問が特に無ければしばらく解散！

30分後にグラウンドに集合しておけ」

不動 「……ちっ！……」

四季菜は豪炎寺と目が合った

だが豪炎寺はすぐに目を逸らして宿舎の方へと行ってしまった

四季菜 「豪炎寺君……」

円堂は鬼道と四季菜の近くに來た

円堂 「何か体も心もメラメラ燃えて來たっつ!!」

絶対に奴らの好きにはさせない!

絶対試合で勝つぞっつ!!」

不動以外の全員 「おおーっ!!!!」

四季菜 「すごい、この土氣の高め方…さすが世界一のキャプテン」

壁山 「でもやっぱり怖いッス…月の人間てどの位強いんすかね」?

ヒロト 「重力は地球の6分の1しか無いんだよね?普通に考えたら地球の方が強そうだけど」

四季菜 「それは地表での話
私達の世界は地下に作られていた
下に行くほど地圧がかかって重力も比例して來る
實際私達が住んでいた都市は地球の重力で表すと3Gはかかって
いたわ」

鬼道 「地球の3倍か…乗り越えられない数字では無いな」

円堂 「ああ、努力すればそのぐらいの壁、
ずばーんと破ってみせるさ??」

秋 「月影さん、はい!これ、あなたのユニフォームよ」

秋は透明の袋に入った青いユニフォームとジャージを四季菜に渡した

四季菜 「 ありがとう 」

四季菜の顔を覗き込んで

吹雪 「 四季菜ちゃん、そんな可愛い顔してサッカー出来るの？

驚いたなあ 」

鬼道 「 (^ ^ ; ; ; 近い近い...)

吹雪、あまり四季菜を甘く見ない方がいいぞ ？ 」

不動 「ふんっ... 」

春菜 「 お兄ちゃん、ちよつと..... 」

春菜が心配そうな顔で鬼道に話しかける

鬼道 「 あ、ああ ？ 」

春菜は鬼道を木の陰に連れて行った

春菜 「 お兄ちゃん、どういう事？

あんなにたくさんさんの女の子に言い寄られてもサッカー 一筋で彼女
なんて今まで作らなかったお兄ちゃんが...

一体どういう風の吹きまわし？ 」

鬼道 「 春菜に報告が遅れたのは悪いと思ってる

俺は今までお前だけを守って生きてきた

だがお前と同じ位大事にしてやりたいと心から思える人が現れたんだ
四季菜と俺の事、認めて欲しい 」

春菜 「付き合うなどか言うつもりは無いけど、私はあの人の事まだ良く知らないから、いい顔しろって言われてもいまは無理だから――!!」

鬼道 「春菜……」

四季菜は遠くの木陰で話している鬼道兄妹を見つめていた

春菜ちゃん、お兄ちゃん思いだから私の事気に入らないんだろうな、きつと

四季菜 「あの、私 監督に話があるからこれで……」

吹雪 「名残惜しいけど、また後でね」

四季菜 「（^^;; ……）」

四季菜は一人監督のいる宿舎の方へ向かった
宿舎玄関に近づいた辺りで誰かが声をかけて来た

不動 「おい、ちょっと待てよ？」

四季菜 「私？ですか？」

不動 「そう、お前だよ、
お前なんかの為に戦うなんて、俺はごめんだぜ？」

だつたらいらねーよ！
って言いたいところだけど、この人も呼ばれたって事は実力があるんだろうな
お父さんを助ける為にも、ここは我慢しなきゃ

四季菜 「どうしたら戦う気になってくれるんですか？」 ムスッ

不動 「へえ」
怒った顔もかわいいじゃん？」

何、この人……？

不動 「俺にキスしてくれたら
考えてあげてもいーぜ？」

不動はそう言つと四季菜の腰に手を回して自分の方へ引き寄せた

四季菜 「ちょっと！！ からかわないで下さい！！」

四季菜は不動から離れようと抵抗した

不動 「あんたほんとに宇宙人と戦う気あるワケ？
俺は譲歩してやってんだぜ？」

四季菜 「 !…………… 分かりました……………」

四季菜はそう言うと不動の首に両腕をまわして自分からキスをした

……………ん……………

不動 「 ! ! !」

四季菜はキスをし終わると自分から離れた

不動 「 お前、アタマおかしいんじゃないのっ？

／／／ 鬼道のオンナのくせして他の男とキスするなんて」

四季菜 「 ……これで、戦ってもらえますね？」

冗談のつもりだったのに

何て目えしやがるんだ

この俺が圧倒されるなんて…

不動 「 あ？ああ、…チツ

分かったよ！」

四季菜は宿舎の中に入って行った

目の前に豪炎寺が立っていた

豪炎寺 「 フツ 見てたぞ、お前、本当にすごい意気込みだな

」

四季菜 「 豪炎寺君…！？ 見てたなら止めてくれたって…」

豪炎寺 「俺が止めたところで 不動の気持ちは変えられなかったさ」

四季菜 「……………」

あ、ねえ 監督どこにいるか知ってる？」

豪炎寺 「多分、上の階だ」

四季菜 「ありがとう ……じゃ…」

豪炎寺 「月影！」

四季菜 「…?…?…」

豪炎寺 「鬼道と…うまくやれよ？」

豪炎寺はそう言つと去つて行つた

四季菜 「豪炎寺君……ありがとう」

コンコン、

久遠 「はい」

四季菜 「月影です、今宜しいでしょうか？」

久遠 「構わない、入りなさい」

四季菜 カチャ… 「失礼します」

四季菜 は名月達の事を知っている限り話した

四季菜 「彼等はおそらくサッカーは何年もやっていないと思います、娯楽は禁止している筈ですから
メンバーはおそらく私が月でサッカーチームを組んでいた頃のメンツを揃えてくるでしょう

彼等は名月の仲間となりましたが、所詮は利害関係で繋がっているだけ、信頼関係はないと思われます

そうなれば試合中にチームプレーを乱すことが出来るかも知れませんが、私より長く月にいるわけですから、私よりもはるかに身体能力が高くなっていると思います

残りの日数でイナズマジャパンの選手達には限界まで身体能力を引き上げる必要があります

そこで私に提案があるのですが……」

久遠 「それは何だ？」

四季菜 「選手の練習メニューを私に考えさせて下さい」

久遠 「……………」

分かった、危険な賭けかもしれないがいいだろう」

四季菜 「ありがとうございます！」

久遠 「それともう一つ」

四季菜 「何でしょうか？」

久遠 「鬼道の事だが、試合が終わるまで君とは距離を置いてもらいたい」

四季菜 「！！………そうですね、

………分かりました」

久遠 「全員揃ったか？」

全員 「はい！！」

久遠 「まずはチームに分かれて練習試合をやってもらうメンバーはくじ引きで決める
試合時間は30分、その代わり終始全力を出し切れ」

目金 「でも監督、18人しか居ないのでは分かれたらチームの人数が足りなくなりますが…」

久遠 「9対9で構わない」

皆不思議に思いながらもくじを引いた

チームA

G K 円堂 守

F W 豪炎寺 修也

F W 宇都宮 虎丸

M F 土方 雷電

M F 風丸 一朗太

M F 緑川 リュウジ

D F 吹雪 士郎

D F 壁山 塀吾郎

D F 栗松 鉄平

チームB

G K 立向居 勇気

F W 染岡 竜吾

F W 基山 ヒロト

M F 鬼道 有人

M F 不動 明王

M F 佐久間 次郎

D F 飛鷹 征矢

D F 網海 条介

D F 木暮 夕弥

吹雪 「あれ？ 四季菜ちゃんはやらないの？」

四季菜 「まずは皆さんの实力を見せて下さい」

ピーーーーーッ

試合開始のホイッスルが鳴った

最初にボールを蹴り出したのは豪炎寺、虎丸へとパスが渡る

虎丸「俺、一気に持ち込んで R C シュートをぶちかまして見せますよ」

虎丸は2人、3人とドリブルで交わしながらゴールへと近付いて行った

不動「残念だったな？そこまでだ！」

不動がジャッジスルーでボールを奪った

不動「鬼道、佐久間、あれをやるぞ！」

3人は皇帝ペンギン3号 G 2 をくりだした

円堂「ゴールは割らせない、ゴッドキャッチ G 5 ！！」

円堂は見事にボールを止めた

円堂「吹雪！」

ボールは吹雪に渡った

吹雪「土方君、アレ、行くよ？」

2人はサンダービースト改をくりだした

立向居 「魔王？ザ？ハンドG5！」

ボールを止めた

立向居 「ヒロトさん！」

ボールはヒロトに渡った

風丸「そうはさせるか！風神の舞 改！緑川！」

風丸はヒロトからボールをカットして緑川へパスした

緑川 「ライトニングアクセル！」

ゴールまであがって来た

緑川 「アストロブレイク！」

木暮 「入れさせるもんか！新旋風陣！」

カットしてこぼれたボールを今度は豪炎寺が拾っていた

豪炎寺 「まだまだ！真 爆熱スクリュー！」

飛鷹 「決めさせない！真空魔V3！」

少し威力の落ちたボールを今度は立向居が止める

立向居 「魔王？ザ？ハンド！ 鬼道さん！」

鬼道はボールを持ち込む

鬼道 「真イリユージョンボール！染岡！」

染岡はゴールまであがって行った

染岡 「行けー！ドラゴンスレイヤーV3！」

吹雪 「止める！真スノーエンジェル！」

少し威力の落ちたボールを今度は

円堂 「真イジゲン？ザ？ハンド！」

ボールははじかれた、栗松が拾った

栗松 「まぼろしドリブル！」

どんどんあがって行く

佐久間 「させるかー！」スライディングでカットして「綱海！」

今度は綱海が上がる

綱海 「ザ？タイフーンV3！」

土方 「止める！スーパーしこふみ！」

威力の落ちたボールを

立向居 「魔王？ザ？ハンド！風丸さん！」

風丸に繋いだ

風丸 「吹雪！」

吹雪 「アレだね？分かった！」

風： 吹 「ザ？ハリケーン！」

シュートを放った

鬼： 不動 「うおおお！キラーフィールズ！」
渦に巻かれたボールは鬼道が持ち込む

鬼道 「ヒロト！」

ゴール前でヒロトに渡った

ヒロト 「天空落とし！」

円堂 「ゴッドキャッチG5！……うわあーっ」

ボールはゴールを突き刺した

ピピピーーーーーイ！！

試合終了のホイッスルが鳴った

月から来た少女 イナイレ 第十四章

試合は0対1でチームBが勝った

四季菜 「……………監督、では私は自分の部屋に帰ります」

四季菜は表情一つ変えずに宿舎へ戻って行った

久遠 「分かった」

春菜 「監督、何故あの人だけ特別扱いなんですか？
選手にドリンク渡して行く位したっていいと思います！」

監督 「今日の残り時間は基礎体力を付ける
ランニング50週、腕立て100回、もも上げ300回、腹筋50
0回だ、以上！」

春菜 「監督！」

春菜は納得しかなかった
四季菜はただ黙って試合を見ていただけで、試合が終わった後も選
手へのねぎらいもなく部屋へ戻って行ったのだ
四季菜が冷たい人間に思えてしょうがなかった
鬼道を取られたという嫉妬もあった

お兄ちゃんは何であんな人を選んだの？
ただ美人なだけじゃない
まさか、騙されてるの？

不動 「妹はお兄ちゃんを取られちゃって嫉妬してるみたいだねえ？ 鬼道くん？」

鬼道 「何が言いたいんだ、不動？」

不動 「別に、ただ妹はお兄ちゃんが騙されてるのに気付いたみたいだぜ？」

鬼道 「どういう意味だ？ 四季菜が俺を騙してるとでも言うのか？」

不動 「ハッ…あの女ならさつき宿舎の前で俺に熱いキスをお見舞いしてくれたぜ？」

鬼道 「ふんっ…そんな話をこの俺が真に受けるとでも思っのか？」

不動 「目を開けてると分からないけど目を閉じると左の瞼に小さなホクロがあるんだよね」

鬼道 「お前、何故それを？ 四季菜に何をした？」

不動 「だからさつきから言っただけじゃん？
向こうからキスして来たんだって」

鬼道 「…？…」

どういう事なんだ

あいつの口から聞きたい

鬼道 「監督、四季菜の部屋に5分だけ行かせて下さい！」

久遠 「それは認められない、全員月影には今日から3日間、会
う事を認めない」

全員 「どういう事なんですか？」

久遠 「余計な事は考えなくていい、今は練習にだけ集中しろ」

く 夕食時 く

壁山 「もうお腹ペコペコっす」

緑川 「ハードな練習だったな」

栗松 「もう死にそうでヤンす」

秋 「はいはい、みんな、たくさん食べてね」

冬花 「おかわりもたくさんありますからね」

春菜 「あの人は、ご飯どうすんのかな？」

夏未 「あの人って…月影さんの事？」

春菜 「 え？あ、はい、まあ…（＾＾；；；」

夏未 「 彼女ならさっき食事は要らないって連絡あったわ」

秋 「 夏未さんだけ月影さんと話し出来るの？」

夏未 「 といってもパソコンから来るメールよ、さっきこちらからも送ってみたけど返信は無いわ」

春菜 「 何ですか？その横柄な態度、私絶対許せません！」

冬花 「 敵意むき出しですね？」

春菜 「 （怒）それが何か？」

冬花 「 い、いえ……（汗）」

春菜 「 私、彼女の事は仲間だとは思いませんから！」

秋 「 鬼道君の事、相当ショックだったみたいね…」

夏未 「 シスコンだけかと思ってたけど、ブラコンもあるのね？」

鬼道 「 何か言ったか？（怒）」

豪炎寺 「 シスコンで言葉は俺も聞き捨てならないぞ？（怒）」

夏未 「 …（＾＾；；； 以後慎みます…」

吹雪 「 なあんだ、四季菜ちゃんと3日間も会えないのか？」

綱海 「夕飯時にいっぱい話したかったのによ、」

豪炎寺 「彼女はチームの為に何かやる事があるんじゃないのか？」

円堂 「そうだな、きっと豪炎寺のいう通りだ、チームに戻って来たら話してくれるさ

俺達は監督のいう通り、今は練習の事だけに集中しよう！」

鬼道、不動以外の全員 「おお？」

俺は練習だけに集中なんて無理だ

どうしたって考えてしまう

俺は彼氏なのに

どうして何も言ってくれないんだ

春菜 「お兄ちゃん……」

それから3日間が過ぎた

四季菜は皆が練習しているグラウンドにとつとつ現れた

鬼道 「四季菜！」

最初に駆け寄ったのは鬼道だった

鬼道 「何故何も話してくれなかったんだ？」

四季菜 「私の事何も信用してないのね、ガッカリよ？鬼道君、
気持ちがプレーに出て乱雑になってたわよ」

四季菜は冷たく言い放った

鬼道 「…四季菜…」

そのやりとりを遠くで見ていた春菜はやはり兄は騙されたのだと思
った

四季菜 「今日から皆さん1人1人の練習メニューを配ります」

染岡 「何だよそれ？監督じゃなく何でお前が指示するんだ？」

四季菜 「染岡竜吾、気が短い為、試合開始時にかなりの確率で
相手の策にはまりやすい」

染岡 「…な、何い？（怒）」

木暮 「ちょービンゴな事いわれちゃってるよ、ウッシッシッ」

四季菜 「だが策にはまるもそれを乗り越えられる不屈の精神、
人一倍の努力も欠かさない」

染岡 「お前…！ 俺の事をそこまで分析したのか？」

四季菜 「今のあなたに足りないのは試合開始時から相手の手の内を読む千里眼よ、

あなたの練習メニューはズバリ剣道をしてもらいます」

風丸 「そうか、剣道のように面をかぶっていると相手の手の内を読むのは難しいからそれを訓練するんだな？」

染岡 「そうか、そういう事なら俺はやるぜ、気が短いのは自分でも気付いてたからよ」

四季菜 「千里眼をやしなうのはあなたが怪我をしない事にもつながるわ」

四季菜はそう言って不動をチラッと見た

不動 「なあんだよ？俺が昔染岡に怪我させた事言ってるのか？あん時は新帝国学園だったんだからしょうがねえだろ？」

四季菜 「不動明王、幼少期の大人のさまざまな事情により心に茨をはってしまっ、だがサッカー仲間とだけは信頼関係が大分出来上がっている、

強引なプレーが仲間にも誤解を招く事が多い、だが動きは繊細かつセンスにおいては天才的、あなたの練習メニューは川でやってもらうわ」

木暮 「いよいよサッカーに関係なくなってきた、ウッシッシ」

不動 「何で俺がそんな事しなきゃなんねーんだよ？」

四季菜 「川を泳いでいる魚は強引に取ろうとすればあつという

間にすり抜けてしまう、

魚の動きを読み取って慎重にやってこそ取れるものなのよ、あなたはそれで間合いの柔軟さを鍛えるのよ」

久遠 「言っておくが月影の練習メニューは監督命令でもある、背く者は前にも言ったとおり反逆罪になるからそのつもりでいてくれ」

監督はそう言っていると自分の部屋へ戻って行った

不動 「…分かったよ、くそっ試合が終わったら覚えてるよ？」

四季菜 「フツ その時はまた私に強引にキスさせる？」

ほぼ全員 「……ええーっつ？ / / / /」

鬼道 「……？」

なんて事だ、やっぱり不動が強引に仕掛けていたんだ
なのに俺は……

四季菜を少しでも疑っていたなんて……
最低だ

四季菜はそうして選手1人1人に的確なアドバイスをし、練習メニューを指示した

その度に皆は指示された場所へ移動して行った

春菜以外のマネージャーは買い出しに出掛けて行った

四季菜 「円堂君、あなたはやはり動体視力を鍛えなければいけ

ないわ、

二丁目の大通りで両車線行き交う車の色や車種が全部分かるまでひたすら目で追ってもらいます」

田堂 「ええーっつ？ 全車種う？

でもやれるようにならなきゃ奴等に勝てないんだろ？

よーし、絶対に見極められるようになってみせるぞー！！」

四季菜 「豪炎寺君、あなたは攻撃に関しては完璧だけど、防御から攻撃に切り替える時だけが少しぎこちなくて遅いわ、相手にその部分だけつけいらせてしまう、そこを改善しましょう、

イナビカリ修練場には攻守瞬間切り替え装置があるみたいだから更なる改良をお願いしておいたの、あなたにはそこでの特訓をお願いします」

豪炎寺 「フッ 気付いていたのか、さすがだな？」

四季菜 「早く身に付けてね、でないと新必殺技の練習が出来なくなるわよ？」

豪炎寺 「ああ、そうだな」

四季菜 「鬼道君、あなたにはどんな時でも冷静な心を持っていなければならぬ

私に何かあってもあなたはチームを指示で引っ張って行かないとならない

プレーに支障が出ては困るの

あなたには禅の修行をして精神の鍛練してもらいます」

鬼道 「プレーに出ていたの、分かっていたのか、フツ 我ながら情けない
お前のいう通りだ、俺にはもっと物事に動じない心を鍛えなければ
ならない
その練習メニューを受けてみよう」

四季菜は笑って手を差し出した
鬼道も笑って握手をした

残るはヒロトだけだった

ヒロト 「残るは僕だね？何の練習メニューなのかな？」

四季菜 「あなたは今まで通りでいいわ」

ヒロト 「え？何で僕だけ？」

四季菜 「あなたはサッカーに対する尊敬も仲間への信頼も人の心の痛みも全て知っている、あなたはすでに全てを学んでいる、技の破壊力もさながら身体能力も飛び抜けている、私が指示する事は何も無いわ」

ヒロト 「光栄だな、じゃあご褒美に僕の練習の相手をしてくれる？」

四季菜 「？ ええ、私で良ければ喜んで」

春菜 「 たった3日間で全員の事をこんなに分析していたなんて…
ご飯も口クに取らず、お兄ちゃんと話する間も惜しんでチームの
ために寝ないで練習メニューを考えてくれたんですね
私、月影先輩の事誤解してました」

四季菜 「 そもそも私のせいでチームを巻き込む事になってしま
ったんだもの、この位やって当然よ、春菜ちゃん、私はもう鬼道君
とは距離を置くから安心して」

春菜 「 何ですか？もしかして私のせいですか？」

四季菜 「 あなたのせいじゃないわ、鬼道君は私の事になるとそ
れがプレーに表れてしまう、司令塔なんだから、それではダメなの、
私と距離を置けば、もっとサッカーに集中出来ると考えたからよ、」

春菜 「 月影先輩、それ程までにお兄ちゃんの事……
でも試合に勝ったらまたお兄ちゃんの所へ戻って来てくれますよね
？」

四季菜 「 鬼道君さえ良ければ、ね？」

春菜 「 はい??」

四季菜 「 じゃあ、ヒロト君、グラウンドに行こうか？」

歩きながら――

ヒロト 「 鬼道君が羨ましいな、こんなに大事に想われて」

四季菜 「 クスッ そうかな？」

ヒロト 「ボソッ…僕にそのまま向いてくれればいいのに」

四季菜 「何か言った？」

ヒロト 「ううん、何も」

グラウンドに來ると四季菜はゴールの前に立った

四季菜 「じゃあ私に天空落としを打ってみて」

ヒロト 「そんな事したら、君が怪我しちゃうよ？」

四季菜 「大丈夫だから、打ってみて」

ヒロト 「……分かった、行くよ？」

天空落とし！」

ピカーー ズバーーッッ！！

四季菜 「止めるーっっ！！」

ビシーーーーッッ！！

四季菜は足でボールをカットした

ヒロト 「す、すごい…… 噂以上だね？」

四季菜 「まあね？ もっと力が強く入る方法教えてあげる」

四季菜はヒロトの隣りに並んで手取り足取り教えた

四季菜 「足はもう少しこの高さでー」

四季菜ちゃん、いい香りするんだな、近くで顔を見ると本当に可愛いなあ

まつ毛も長くて、目も大きくて、鼻はツンと高くて、唇は潤ったピンク色で肌は透き通るように白い

僕も色は白い方だけど、四季菜ちゃんはもっと白いんだな、頬だけほんのりピンクで、

でも何といつてもこの瞳がたまらないな
見ていると宇宙に吸い込まれて行きたいだ

ヒロトは四季菜に見とれていた

四季菜 「ヒロト君、聞いている?」

ヒロト 「ああ、ごめん、聞いてなかった」

四季菜 「もう、もう一度言っよ?」

ヒロト 「うん…」

僕は四季菜ちゃんに
恋をした

四季菜 「私は調理法のアドバイスをしただけ、秋さん達が上手に調理してくれたから上手くごまかせたのよ？」

春菜 「四季菜さん、私もっと色々勉強します、たくさん教えて下さいね」

冬花 「春菜さん、呼び方も変わって月影さんと和解したみたいですね？」

夏未 「それについては良かったわね、でも…」

秋 「でも？」

夏未 「ボソ…鬼道君と別れたっばいわよね？」

冬花 「そう言われてみれば、2人ともちつとも話してませんね？」

春菜 「聞こえましたよ、夏未さん？」

お兄ちゃんと四季菜さんはお兄ちゃんが試合に集中出来るように距離を置いてるだけです！勘違いしないで下さいね！」

秋： 夏： 冬 「 σ (^ | ^ ;) そ、そうなんだ？」

網海 「おゝい、月影！みんなも厨房ばっかいないでたまにはこっち来て話でもしようぜ？」

四季菜 「いいですよ？」

綱海 「おいおい、年上だからって敬語なんか使わなくていいぜ
カッカッカッ」

円堂 「綱海今は高校サッカーだもんな、また一緒にプレー出来
て嬉しいよ?」

綱海 「ああ、俺もだぜ?月影、鬼道、ありがとな?またみんな
とプレー出来る機会を与えてくれて、」

鬼道 「こつちこそ、みんなを巻き込んですまない」

鬼道は皆の前で頭を下げた

四季菜 「鬼道君……」

円堂 「何言ってたんだ?仲間の危機は自分の危機、一緒に乗り越
えよーぜ?二カッ」

綱海 「あつたりめーよ!」

佐久間 「鬼道、どこまででもついて行くぜ?」

風丸 「そうさ、宇宙人なんかに負けてたまるか!」

鬼道 「円堂、みんな……ありがとう!」

四季菜 「このチームは本当に素敵、仲間って……いいな」

春菜 「ではまだまだ謎の多い四季菜さんへの質問タイムにした

いと思いまーす」

木暮 「はい、質問！」

春菜 「木暮君 どうぞ」

木暮 「鬼道さんと月影さんはまだ付き合ってるんですか？ウツシツシツ」

全員 「いきなりその質問？（^^;;）」

鬼道は思わず黙ってしまった

四季菜 「はい！」

木暮 「なあんだ、もう別れてるのかと思った」

春菜 「木暮君！（怒）」

四季菜 「今は鬼道君に試合に集中してもらったため距離を少し置いてるだけ、ね？有人？」

鬼道 「四季菜…… ああ！」

鬼道は少し微笑んだ

月から来た少女 イナイレ 第十五章

春菜 「他の質問ある人？」

風丸 「はい！」

春菜 「風丸さん どうぞ」

風丸 「雷門中に来る前はどこにいたんだ？」

四季菜 「アメリカで母と一緒に暮らしてたわ、でも誕生日まで母と一緒にだとはっきりやすいという事で私だけ日本に来たのまあ、結局は向こうに全部動きが分かっていたみたいけどね…」

夏末 「その時に大学の修了課程までとったのね？」

四季菜 「何故それを？」

夏末 「私もあなたの事を調べさせてもらったわ
月影四季菜、NASAの技術者である両親の派遣先であった月にて出生、

以後地球から救出されるまでの12年間を月で過ごす
地球にやって来てからは、2年間はイギリス、フランス、オーストリアで過ごす

趣味の絵画はフランスで習った事がきっかけである

14歳になってから母親がNASAへ復帰

一緒にアメリカへ移り住む

そして母親の本籍がある日本へ

どう？合ってるかしら？」

四季菜 「その通りよ」

吹雪 「すごいね 大学まで出てるんだ？」

染岡 「お前、何か国語話せるんだ？」

四季菜 「住んでいた国の言葉なら」

ヒロト 「四季菜ちゃんは何の食べ物が好き？」

鬼道 「また勝手に名前呼び……（^^;;）」

四季菜 「果物が好き、かな？」

土方 「尊敬する人は？」

四季菜 「……父親です、もう質問はいいかな？ 私そろそろ部屋に戻らないと」

円堂 「…あ、ああ」（悪い事聞いちゃったな）

四季菜はお風呂を終えて廊下を歩いていた

グイツ 「！！」

四季菜は腕を引つ張られて誰かの部屋に押し込まれた

不動 「騒ぐなよ？」

四季菜 「不動君！何するの？」

ぎゅーっ

不動は力強く四季菜を抱きしめた

四季菜 「不動……君……？」

不動 「お前鬼道と今距離置いてんだろ？」

だつたら俺にもチャンスはあるよな？

お前なら俺の事分かってくれそうなのがすんだ
頼む、少しこのままでいてくれないか？」

四季菜は抱きしめてくる不動の手を振りほどいて自分から抱きしめ直した

不動は四季菜の胸に顔をうずめ甘えるように腰に手をまわした

不動 「お前……優しいな……」

ざまあねえな、お前の前だと俺が俺でなくなっちまう」

四季菜 「こっちの不動君がほんとの不動君なんだよ……きっと」

2人はしばらくそのままでいた

不動 「月影…好きだ…」

四季菜 「ごめん、でも私は鬼道君の事が…」

不動 「分かってる、でも好きだ…」

四季菜 「不動君……ごめん、私もう行くね？」

不動 「……ああ」

四季菜が不動の部屋から出る所を鬼道はたまたま目撃した

鬼道 「四季菜！」

四季菜 「！！ 有人？」

鬼道 「お前今不動の部屋で何をしていた？」

四季菜 「別に何も…」

鬼道 「そんなわけないだろう？」

お前は俺の彼女なんだ、他の男と仲良くするな！」

四季菜 「不動君は今自分に素直になろうとしてる、そのために今は私が必要なの
私が好きなのは有人だけよ？」

鬼道君 「悪いが、俺はそこまで心が広くない」

鬼道はそう言うと四季菜から去って行った

四季菜 「 有人……」

四季菜は自分の部屋へ戻ると声を押し殺して泣いた

有人の言った事はもつともだ

でも私には不動君を放っておくなんて出来ない

有人とはもう、終わりなんだろうな……

〃 次の日 〃

朝ご飯の時も鬼道と四季菜は目も合わさなかった

皆何か異様な空気を感じていた

久遠 「 今日からは午前中が月影の指示した練習メニュー、午後からは私の指示で練習してもらう」

全員 「 はい！」

ヒロト 「 四季菜ちゃん、今日も特訓頼むね？」

四季菜 「 あ、うん」

鬼道は顔色一つ変えずに食堂を後にした

夏未 「 やっぱりあの2人おかしくない？」

春菜 「 昨日あの後2人に何かあったんでしょうか？」

だが誰も聞ける雰囲気ではなかった

ヒロト 「目が少し赤いよ、昨日泣いたんでしょ？」

四季菜 「まさか、アレルギーだよ、きっとさ、練習しようか？」

ヒロト 「無理しちゃって」

四季菜 「今日はマンツーマンでバトルしましょう、行くよ？」

ヒロト 「お手柔らかにね？」

四季菜は勢いよくドリブルで駆け上がった

ヒロトは何度も目の前に立ってボールを奪おうとするが、ボールに触れる事すら出来なかった

ズバァーッ

四季菜はゴールを決めた

ヒロト 「ハアハア 四季菜ちゃん、ほんとすごいね？
動きが速くて全くボールにさわれなかったよ」

四季菜 「動きが速いんじゃないわ、人間力学に基づいた動きを
しただけよ」

ヒロト 「……………！　　そうか、右に行けば相手は左に、左に行
けば相手は右に
その条件反射を利用して逆手にとったんだね？」

四季菜 「やはりあなたは頭脳明晰ね？説明しなくてもそこまで
気づくなんて
じゃあ次はそれを踏まえてボールをとってみて」

ヒロト 「ああ、やってみる」

ヒロトは何度も挑戦した
何度もやるうちに四季菜からボールを奪えるようになった

ヒロト 「ゴールまで持ち込めたぞ、天空落とし！！」

ピカーッ　ズバアアアッ！

ヒロトはゴールを決めた

ヒロト 「やったー！！どう？四季菜ちゃん？」

ヒロト 「すごいわ、こんなに短時間でマスターするなんて、ヒ
ロト君はもう私を超えてるわよ？」

ヒロト 「本当？嬉しいな、四季菜ちゃん、もっと褒めてよ？そし
たら僕、もっと頑張れるからさ？」

四季菜 「 クスッ まるで子供みたいね？

ヒロト君、偉いぞ」

四季菜はヒロトの頭を撫でた

ヒロトは満足した顔で四季菜を見つめながら

ヒロト 「 鬼道君に、フられたんでしょ？」

四季菜 「 ！！／／／／ ……さすが、勘がいいのね」

ヒロト 「 四季菜ちゃんがモテるのがいけないんだよ、鬼道君はああ見えてヤキモチ焼きだからね」

ヒロトは四季菜を後ろから抱きしめた

ヒロト 「 僕なら自分が一番だったら多少は許すけどな」

四季菜 「 ヒロト君……でも私、」

ヒロト 「 分かってる、でも今フリーなんでしょ？だったら僕に向いてもらえるまで頑張るよ？」

四季菜 「 ……ヒロト君……」

） お昼ご飯 ）

ヒロト 「 四季菜ちゃんも一緒に食べようよ？ 僕の特訓に付き合
つてお腹空いてるでしょ？ 」

秋 「 そうよ、月影さん、こっちはいいから食べちゃって？ 」

四季菜 「 あ、うん、ありがとう 」

ヒロト 「 お盆、僕が運んであげるよ、あそこで一緒に食べよう
？ 」

ヒロトが四季菜を独り占めしていると不動がやって来た

不動 「 何だよ、ヒロト？ 月影にベタベタし過ぎなんじゃね
の？ 」

ヒロト 「 特訓に付き合ってくれたお礼だよ？ 」

不動 「 それだけじゃねえだろ？ 」

おい、鬼道！ お前も何とか言ったらどうなんだ？ 」

鬼道 「 俺はもう、四季菜とは関係ない 」

ほぼ全員 「 ええー？ （昨日の今日で？） 」

鬼道は食堂を出て行った

円堂 「 鬼道……………」

豪炎寺 「……………」

ヒロト 「四季菜ちゃんがフリーなら誰も文句は言えないはずだよ？」

ヒロトの目つきが変わった

不動 「何だよ、お前 その目は？ ああ？」

不動がヒロトの胸ぐらをつかんだ

四季菜 「もうやめて！ 2人ともいい加減にして！！」

ヒ： 不 「！！」

四季菜 「私は誰とも付き合わないし誰のモノになる気もないから！！」

いさかいはチームプレーを乱すだけよ、2人ともこんくだらない事でもめないで！！」

四季菜も食堂を出て行った

ヒロト 「あゝあ、怒らしちゃった」

不動はヒロトから手を話した

不動 「言い過ぎたよ、悪かった…」

不動も食堂から出て行った

ほぼ全員 「不…不動が人に謝った…？」

く グラウンド く

久遠 「今日の練習から月影も参加する
まずは得意技の練習だ！」

全員 「はい！」

円堂 「鬼道、お前大丈夫か？」

鬼道 「この位の事で揺らいでたら司令塔など務まらない、円堂、
心配してくれるのはありがたいが俺は大丈夫だ」

円堂 「そうか、ならいいんだ
みんな、張り切ってこうぜー！！」

全員 「おおー！！」

確かに俺の気持ちは穏やかではない
四季菜の事を狙う奴が増える度に嫉妬の炎が燃えさかる
だが四季菜が俺の事を本気で好きなら誰のモノにもならない筈だ
俺はそれを信じるしかない
この事でサッカーに支障を出すわけにはいかない

それこそがあいつの望みだから

全員はグラウンドの中で5、6人ずつに分かれて練習を始めた

四季菜は立向か居、豪炎寺、吹雪、風丸と練習を始めた

四季菜 「豪炎寺君、新必殺技の練習、しようか？」

豪炎寺 「ああ、頼む」

吹雪 「やっと四季菜ちゃんがサッカーするところ見えるね？お手並み拝見させてもらうよ？」

四季菜はボールを高く蹴り上げた

風丸 「軽々とあんなに高くまで？」

四季菜は自分も高くジャンプすると大きく蹴り込んだ

吹雪 「すごい勢いだ？」

豪炎寺 「マキシマムファイアー！！」

立向居 「魔王？ザ……………うわあ……………！！」

ズバァーッ！！

立向居が技を繰り出す間も無くボールはゴールに突き刺さった

立向居 「すごい…すごいです！！豪炎寺さん！！」

豪炎寺 「この技は月影のキック力から来るパスが無いと完成しない、皆には月影へのパスが重要なんだ」

吹雪 「分かった、少しでも四季菜ちゃんにパスを繋げるよう頑張るよ」

このシュートなら宇宙人にも通用するよ、きっと」

風丸 「俺達も負けてられないな？」

吹雪 「そうだね、連携技を強化させなきゃね？」

四季菜 「まだ2人とも動きに無駄があるわ、私に修正させて」

風： 吹 「お願いしま〜す」

虎丸 「いいな〜あっちのグループ、俺だって月影さんに見てもらいたいですよ」

鬼道 「文句を言うな、今は自分の意識を高めろ、そのうち見てもらえるさ」

その日の夜

四季菜は屋上に上がって月を見ていた

円堂 「なんだ、月影もここにいたんだ？」

四季菜 「円堂君、どうしたの？」

円堂 「こうやって夜空を見にくるのが好きなんだ」

円堂は四季菜の隣りに来て体育座りをした

円堂 「月を…見ていたのか？」

四季菜 「うん、お父さんがあそこにいるんだと思うと、胸が熱くなるの

早く助けてあげたい」

円堂 「月影…

絶対、絶対、絶対ぜえつたい、助けような？ ニヒッ！」

四季菜 「円堂君……ありがとう……」

四季菜は涙をこぼした

円堂 「……

そういえば、今朝月影が出て行ったあと不動がヒロトに謝ったんだぜ？ビックリだよな？」

四季菜 「 不動君が…？
変わろうとしてくれてるのね…」

四季菜はさらに涙を流した

四季菜達は毎日猛特訓をした
選手達は全員格段にレベルが上がっていた

試合の日まであと2日という日

四季菜の母親が雷門にやってきた

母 「 四季菜…！！」

皆 グラウンドで練習中だった

四季菜 「 お母さん？」

四季菜は急いで母親まで駆け寄った

四季菜 「 お母さん、来てくれたのね？」

円堂 「 あの人が月影のおふくろさん…」

風丸 「母親も超美人だな？」

母 「あと2日でいよいよ試合ね？どう？
練習の方は？」

四季菜 「みんな日に日になつて行くのよ、私を追い抜いた人も何人もいるわ、
この分なら勝てそうよ」

母 「そう、頼もしいわね？」

ボソ… ところでお母さんの忠告まで無視する程好きになった鬼道君てどの子？」

四季菜 「（^^;;） お母さん、それが……私達別れちゃったの」

母 「何で!？」

四季菜 「まあ、私が悪いんだけどね…
あの人よ、ドレッドヘアでゴーグルとマント着けてる人」

母 「何か見た目怪しいわね？（^^;;）
豪炎寺君と円堂君て子は？」

四季菜 「あの人と、あの人
お母さん、みんなに紹介するよ」

四季菜 「監督、一旦練習をストップしてもらっていいですか？」

久遠 「いいだろう、おい、みんな集合!!」

全員監督の元へ集まった

四季菜 「 皆さんに紹介します、私の母です」

母 「 月影 彩と申します、この度は娘の四季菜が大変にお世話になっております

明後日の試合は、どうぞよろしくお願いします

監督さん、私達が月にいた頃のホームビデオがあったので良かったらご覧になりませんか？

何かのヒントにでもなるかもしれませんし」

久遠 「 そうでしたか？是非拝見させて頂きます

お前達も見るか？」

全員 「 はい！見ます！！」

） 談話室 ）

目金 「 では、再生しますよ？」

円堂 「 ああ 頼む」

皆映像を見つめた

父 「 四季菜、こっちにおいで？」

四季菜 「 パパ、だいぢゅき〜! 」

まだ歩き始めたばかりの小さな四季菜の姿が映った

春菜 「 四季菜さん、か〜わいい!〜! 」

四季菜 「 お父さん…夢の中の優しいお父さんだ 」

四季菜は初めて見る映像に目を潤ませていた

母親は四季菜の手をそつと握った

しばらくほのぼのした映像が続いた

そして四季菜が8歳の頃のサッカークラブの映像になった

四季菜 「 それ〜! シュート! 」

子供A 「 入れさせないぞ〜! 」

ボールはカットされた

土方 「 すごいな、全員月影と同じ位実力があるじゃないか 」

四季菜 「 多分彼等が明後日の対戦相手になるわ 」

壁山 「 どの位レベルアップしてんすかね〜
ブルブルッ 」

網海 「 壁山、そうビビンなって、俺達だって相当レベルアップ

してんだ、大丈夫だ！」

四季菜 「彼等だって所詮人間、癖があるからそこを覚えておきましょう」

円堂 「そうだな、少しでも有利になる」

皆食い入るように何度も何度も映像を見直した時には意見も交わして相手の動きを覚えた

サッカーの映像の後は何も映っていなかった

目金 「では停止します」

鬼道 「待て、目金！」

目金 「鬼道君、どうかしましたか？」

鬼道 「映像が終わる5秒前まで巻き戻してくれ」

目金 「は、はい」

鬼道 「……そう、そこだ！」

一時停止した映像にはサッカーグラウンドの外で木の陰に1人だけ立っている男が映っていた

豪炎寺 「こいつは……！！」

鬼道 「こいつが 名月 静二だ」

その男は不気味なオーラを放っていた
その悪魔のような不気味な視線は勝って喜ぶ四季菜の姿をじっと見ていた

壁山 「ええ〜？ この人が〜？ こ、怖いっス〜！！」

綱海 「確かにムチャクチャ怖えけどよ、そんなビビんなくて、壁山」

風丸 「何て恐ろしいオーラなんだ…」

母 「鬼道君、さすがね？ 今まで何度も見ていたのに私も気付かなかったわ」

円堂 「よし、相手の顔も分かったんだ、戦う前から気落ちしてはダメだ！！
俺達は気合いで勝あつ〜！！」

全員 「おお〜〜！！」

母 「素敵なチームに出逢えたわね、四季菜」

四季菜 「ええ、お母さん、史上最高のチームよ
そして大切な仲間よ」

母親は満足そうに雷門を後にした

四季菜はまた屋上で月を見ていた

豪炎寺 「ここにいたのか？」

四季菜 「豪炎寺君？どうしてここに？」

豪炎寺 「円堂に聞いたんだ、お前がここにいるんじゃないかって月を見ていたんだろう？」

豪炎寺は四季菜の隣りにあぐらをかいて座った

四季菜 「明後日、本当に勝てるかな？」

豪炎寺 「珍しく弱気だな？勝つ見込みがあるから今まで必死になって練習したんじゃないかったのか？」

四季菜 「今日見た彼奴の目……」

そのせいでちよつと弱気になっちゃったのかも
そうだよな？こんなに努力して来てるんだもん、勝たなきゃね？」

豪炎寺 「月影……」

豪炎寺は久しぶりにゆっくり四季菜の顔を見た
四季菜はやっぱり美しかった

豪炎寺 「まだ鬼道の事…好きなのか？」

四季菜 「……うん……」

豪炎寺 「…そうか……」

豪炎寺は四季菜に伸ばしかけた手をぐつと堪えた

久遠 「いよいよ今日の深夜0時に約束の日が来る！
あとはそれに備えて十分体力を温存しておいてくれ！
それと月影、

よく選手達をここまで強くしてくれた、全員に代わって礼を言う、
ありがとう！！」

四季菜 「監督……いえ、私こそ、ありがとうございました」

皆約束の時間の2時間前から談話室に集まっていた

四季菜の母親も来た

風丸 「あと2時間だな」

壁山 「トトト、トイレに行ってくるっす」

網海 「まだビビってんのか、あいつ」

四季菜 「私もトイレ」

四季菜は談話室を出た

不動 「月影！」

四季菜 「不動君？」

不動 「あのよ、俺全力で勝つから…お前、変な事考えんなよ？」

四季菜 「変な事って？」

不動 「例えば、名月を殺す…とか」

四季菜 「！！ し、しないわよ、そんな事！！」

不動 「そうか、ならいいんだ」

不動君、勘が良すぎるよ……

もし試合に負けたら……私は彼奴を殺す…

月から来た少女 イナイレ 第十六章

ついに約束の時間が来た

全員グラウンドにいた

月明かりが段々強くなる

目を開けられない程の光が放たれると――

そこには奴等がいた

そして四季菜の父親も

四季菜 「お父さん!!」

母 「あなた!!」

父 「彩、…四季菜…」

父親は弱々しい体で涙を流した

父親の体では奴等が拘束していた

名月 「迎えに来たぞ、我が花嫁よ」

円堂 「名月い！！勝負だ！！」

俺達が勝ったら月影の親父さんは返してもらっぞ！」

名月 「ああ、約束だ、だが我々が負けるわけない」

久遠 「スターティングメンバーを発表する

G K 円堂、F W 豪炎寺、基山、月影、M F 鬼道、土方、風丸、D F 壁山、吹雪、木暮、栗松、

月影の予想通りのメンバーを相手は揃えて来た、勝てる見込みは充分にある

全員練習や特訓の成果を100%発揮するんだ！！分かったな！！」

全員 「はい！」

豪炎寺 「いよいよだな？」

円堂 「ああ、燃えて来た！！」

ピピイーー！！

試合開始のホイッスルが鳴った

イナズマのボールからスタートした

豪炎寺は四季菜に軽くパスした

四季菜はドリブルした

男A 「久しぶりだなあ、四季菜、15歳の誕生日、おめでとう
名月様に選ばれた事を光栄に思えよ？」

四季菜 「名月の手下に成り下がりがあって、お前になんかこの
ボールは渡さない!!」

四季菜はドリブルでかろうじて勝つとゴールを狙った

四季菜 「うおおおーっ!!」

四季菜は渾身の力を込めてシュートを撃った

ドガアアーーーーッ!!

円堂 「月影、何て迫力なんだ、あの力ならきつと入る!!」

男B 「ムーンライトシャワー!!」

男Bは必殺技を放つと簡単にボールを止めた

四季菜 「なっ!!……」

鬼道 「あのシュートが簡単に……」

円堂 「止められた…」

男B 「俺達だってあの頃のままじゃ無いんだぜ？」

四季菜 「やはり一筋縄では行かないようだね？」

相手のカウンターボール

男Cは高速ドリブルであっさり持ち込んだ

鬼道 「真イリユージョンボール!!」

何とかボールをカットした

鬼道 「ヒロト!!」

繋ごうとしたパスを素早くカットされた

男D 「へん、そんなへなちよこパス、余裕だね」

男Dはドリブルでゴール前まで来た

男D 「行くぞ！ ムーンアタック!!」

壁山 「ザ・マウンテンV3!!…うわあ〜!!」

円堂 「壁山？ ようし、ゴッドキャッチG5!!」

………つぐっ!!」

ボールは円堂もろともゴールに押し込まれた

豪炎寺 「ゴッドキャッチが…」

吹雪 「破られるなんて…」

名月 「ハッハッハッ だから言っただろう？

我々が負ける筈など無いと！！」

風丸 「円堂！大丈夫か？」

円堂 「すごいシュートだ…まだビリビリしてる、でも、次は止める！！二カット」

四季菜 「円堂君、それがあなたの強さなんだね…
おかげで勇気が湧いてくるよ」

円堂 「まだまだ1点！！取り返して行くぞ！！」

全員 「おおー！！」

しかしその後、ゴールは割らせないものの、ボールの主導権は相手にあつた

ピピーーーーッ！

前半終了のホイッスルが鳴った

久遠 「後半はDFを減らしてFWを増やす
宇都宮、栗松と交代だ

それと、土方と不動も交代だ」

虎丸 「はい！」

不動 「あいよ！」

名月 「何故もつと点差を開けなかった？」

選手 「も…申し訳ありません、あいつら中々しつこくて…」

名月 「後半はもつとシュートを決めるんだ、いいな？」

選手 「は、はい！」

後半のホイッスルが鳴った
ピピーーーーッ！

男Aがドリブルして来る

鬼道 「不動……ボソボソ」

不動 「気付いたようだな？
よし、作戦開始だ」

鬼道 「うおー！ 止める！」

鬼道はスライディングを仕掛けた

男A 「そんなのお見通しだ！」

不動 「それはどうかな？」

男Aが鬼道から遠ざけたボールを不動が奪った

四季菜 「やった！」

鬼道 「行くぞ！デュアルタイフーンだ！」

全員 「おう！」

不動 「木暮、吹雪にパスだ！二歩半先！」

鬼道 「壁山、風丸にパスだ！風丸！三步前！」

四季菜 「2人をそれぞれ中心に、2つの渦が出来ている、その渦から渦へパスが渡って行く……
すごい、こんな必殺タクティクスがあつたなんて……」

男E男F 「うわあ~~~~！！！」

手出し出来なかった

鬼道 「四季菜~~~~！！！」

四季菜にボールが渡った

四季菜 「行くよ！豪炎寺君！」

豪炎寺 「ああ！」

四季菜 「行っけええーっっ！！」

四季菜は力一杯蹴り込んだ

豪炎寺 「マキシマムファイアーツ！！」

ドガアアーーーーッ！！

ボールは炎を帯びて相手ゴールにとびかかった

男B 「ムーンライトシャワー！！

……うわあ~~~~！！」

ボールはゴールに突き刺さった

全員 「いやったあああーーーー！！」

皆抱き合って喜んだ

名月 「お前っっ！！」

男B 「……ヒイー……お許してください……」

名月 「 問答無用！！」

パアアーンッ!!

銃声が深夜のグラウンドに響き渡った

四季菜 「!!!」

全員 「!!!」

男Bは血まみれで倒れた

秋 「いやあああー!!!」

四季菜 「何故?……何故こんなひどい事……」

四季菜の脳裏にはあの時の光景が浮かんでいた

名月 「言っただろう?全てはお前の為だと、お前は皆を不幸に
しからないのだ!」

私が……皆を……不幸に……?

四季菜 「い……いやあああーっつ!」

四季菜の心は壊れた

母 「四季菜!」

父 「四季菜!」

久遠 「 ！！ 」

鬼道は四季菜を抱き上げた

鬼道 「 四季菜！ しっかりしてくれ！ 四季菜あっつー！！ 」

だが四季菜は反応しなかった

四季菜の瞳は一瞬で暗黒の闇の色に変わった

久遠 「 月影は交代だ、染岡！ 」

染岡 「 は、はい！ 」

豪炎寺 「 月影をこんなにしやがって…絶対に許せねえ… 」

不動 「 サッカーで…殺してやる 」

ヒロト 「 四季菜ちゃん！！ 」

相手ゴールには男Gが入った

同点のまま

相手のカウンターから始まった

男D 「 次も決めてみせる！ 」

鬼道 「 お前達は個人では強いかもしれないがチームプレーは全くなっていない！ 」

だから1人でドリブルで持ち込むしか無いんだ！
そんなものはサッカーとはいわない！！」

吹雪 「真・スノーエンジェル！！ 染岡君！」

吹雪はボールを見事カットし染岡に渡った

染岡 「行くぜ！！」

男Cがカットに入る

染岡 「かと思いきや俺じゃねーぜ？
お前の手の内なんかお見通しよ！！」

ボールは後ろから走り込んでいた虎丸が蹴った

虎丸 「真グラディウスアーチ！！」

男G 「これ以上入れさせる訳には行かない！！
ムーンエキ
スパートー！！」

ボールはGKによつてはじかれた
だがまだボールは生きていた

それをヒロトが拾った

ヒロト 「四季菜ちゃんの為にも、決めてみせる！
天空落としー！！」

ピカーズバアアーツ！！

男G 「ムーンエキスパートー!!」

………うわあ~~~~っっ!!」

ボールはゴールに突き刺さった

全員 「いやったあああーっっ!!」

逆転したぞっ!!」

名月 「こんな…こんなバカな…」

カウンターボールを男Dが最後の力を振り絞ってゴール前まで持ってきた

男D 「ムーンーアタックー!!」

鬼道 「円堂!」

豪炎寺 「円堂!」

全員 「キャプテン!」

円堂 「絶対に…止めてみせる!!」

オメガザ・ハンドーッッ!!

うおおおおおーっっ!!」

ピシュウーッッ!!

円堂は新必殺技を出してゴールを止めた

ピピーーーーッ!!

試合終了のホイッスルが鳴った

春菜 「勝つ……た……」

円堂 「いやったあ! やったぞー!!」

名月 「我々が…負けた…だと?…」

CIA 「名月静二だな?」

名月 「?」

CIA 「お前を国家反逆罪で逮捕する

その他にも殺人、監禁傷害などの罪にも問われるから、覚悟しろ
お前は国際裁判にかけられる」

名月 「俺の悪運もここまでか…フッ!」

名月と仲間は手錠を掛けられ、ヘリコプターで去って行った

父親は手錠を外してもらい、母親と四季菜の元まで自力で歩いて来た

父 「四季菜……何故こんな……うう……」

両親は担架に乗った四季菜にしがみついて泣いていた

そして一緒に救急車に乗って行った

皆宿舎へ戻った

久遠 「皆、良くやった

おかげで月に残されて居た人達も全員解放されるそうだ」

全員 「……………」

久遠 「月影の事は残念だった

だがきつと時が解決してくれる筈だ
お前達の絆があれば、きつと……………」

全員 「うう…ヒック……………はい……………」

合宿は解散した

次の日――

何事もなかったかのように――

学校は再開した

極秘で行われた試合だった為、サッカー部以外の生徒は皆事情を知らなかった

四季菜は長期入院という事になった

豪炎寺 「今日月影の病院に行くのか？」

鬼道 「ああ、もちろんだ、お前もだろ？」

豪炎寺 「ああ、」

放課後――

鬼道と豪炎寺は稲妻総合病院まで向かった

病室のドアには面会謝絶の札がかけてあった

鬼道 「やはり会えないか」

豪炎寺 「ああ、」

2人はその後も毎日病院に通った

ある日突然面会謝絶の札が外されていた

鬼道 「札が外されている」

豪炎寺 「部屋のドア、開けていいのか？」

ガラー…

母 「あなた達ー？」

ベッドには四季菜が眠っていた

鬼道 「四季菜は… とうですか？」

母 「まだ心が壊れたままなの、起き上がっても誰とも会話出来ないのよ、目も虚ろなままだし、こんなになってしまうなんて……」

豪炎寺 「……お父さんの方はとうですか？」

母 「おかげさまで今では体力も回復して、近いうちに退院できるそうよ

主人は豪炎寺君のお父さんが担当だったのよ、
あなた達には感謝してるわ、何と言っても主人や、月に監禁されていた人々、はたまた人類の未来をも救ってくれたんですもの
本当にどうもありがとう」

四季菜の母親は2人に深々とお辞儀した

鬼道 「いえ、お礼なんて必要ありません

1 番勇気があつたのは彼女ですから…」

母 「 そう言ってもらえると助かるわ」

豪炎寺 「 これ、お見舞いです」

母 「 まあ、素敵なお花、四季菜もこの花好きなのよ、花瓶に生けて来るわ」

母親はそう言つと病室を出て行つた

四季菜は寢息も立てずまるで死人のように眠っていた
鬼道は四季菜の手をそつと握つた

鬼道 「 やつと……会えたな……くつ……」

鬼道は齒を食いしばつた

豪炎寺 「 おふくろさんとも話しが出来ないなんてな……」

病室のにはお見舞いの品がもう1つあつた

豪炎寺 「 俺達よりも先に誰か来たみたいだな」

鬼道 「 ああ、」

鬼道は自宅で四季菜との暮らしを思い出していた
もうすっかり荷物は自分の部屋に戻っている

四季菜に読ませてやった本、洗濯物をしまってくれたクローゼット、
1つ1つに思い出が蘇っていた
四季菜の作る美味しいご飯、一つに重なったベッド
目を閉じると涙が込み上げて来た

「私に何かがあってもプレーに支障が出てはいけないわ」

四季菜の言葉が頭をよぎる

「私が好きなのは有人だけよ」

何故あの時突き離してしまったんだ

俺の事が好きだと言ってくれたのに

いつも後悔してばかりだ、俺は

四季菜を好きでいる資格など――ない

鬼道はある決断をした

円堂 「 えっ！ 留学？」

鬼道 「 ああ、イタリアへな、」

豪炎寺 「 こんな時に、本気なのか？」

鬼道 「 俺は四季菜を好きでいる資格などないんだ、あいつが本音をぶつけて来た時に俺は突き離してしまった、あいつを苦しめてしまったんだ

あいつが目を覚ます時は豪炎寺、お前が側にいてやってくれ」

豪炎寺 「 鬼道……！」

円堂 「 FFIはどうするんだ？」

鬼道 「 その時だけは帰って来るさ」

豪炎寺 「 いつ、経つんだ？」

鬼道 「 今日の夜だ」

円堂 「 ずいぶん急じゃないか……！」

鬼道 「 早く日本を離れたいんだ……許してくれ」

その日の夜、鬼道は皆に見送られて旅立った

四季菜は病室で起きていた

窓から飛行機が見えた

面会時間も過ぎており、誰もいなかった

その時、誰かが窓から入って来た

不動「やっと起きてる時に会えたな…」

四季菜「……………」

不動は四季菜を抱きしめて来た

四季菜は何も抵抗しなかった

不動「四季菜…どんなにお前に会いたかったか…お前は俺のモノだ…誰にも渡さない…」

不動は四季菜にキスをした

今までの気持ちをぶつけるように深く激しいキスをした

不動は抑えきれなくなって四季菜をベッドに押し倒した

不動が四季菜の感じる所に触れると、四季菜は少しだけ身体を反応させた

そして涙が一筋流れた

なんだか昔こんな風に抱いてもらった気がする
この人なんだろうか

何故こんなに涙が出るんだろう――

不動は四季菜を抱いた

四季菜「ハア…鬼…道く…ん」

不動と繋がっている時に名前を呼んだ

不動「鬼道じゃねえ、ハア…お前の好きなのはこの俺、不動だ…ハア…間違えるな……」

四季菜は不動にしがみついた

不動「ハア…も…もうダメだ……」

不動はゴムを外すとわざと見えるようにゴミ箱に捨てた

四季菜 「あなたが…私の好きな人？…」

四季菜は初めて喋った

不動 「ああ、お前はいつも優しくかった
いつも俺の事を癒してくれた
今度は俺が癒すから
愛してるよ、四季菜……」

不動は四季菜を強く抱きしめた

次の日

朝早くから豪炎寺は見舞いに来た

四季菜 「…？あなたは誰？」

豪炎寺 「俺は豪炎寺、話せるようになったんだな、でも何も覚えてないのか？」

豪炎寺は嬉しい反面、寂しくもなった

四季菜 「何も……ごめんなさい……」

豪炎寺はゴミ箱の中身を見つけて目を疑った

上からティッシュを被せてとっさに隠した

豪炎寺 「昨日誰か来たのか？」

四季菜 「不動君という人、私の彼氏だったんだって」

豪炎寺 「不動の奴……！！許せねえ！！」

豪炎寺は考えた

豪炎寺 「四季菜、お前が本当に好きなのはこの俺だ
お前は不動に騙されたんだ」

四季菜は混乱した

どっちを信じていいのか分からなかった

豪炎寺 「俺は不動と話をつけて来るから」

豪炎寺はそう言つと病室を出て行った

豪炎寺は帝国学園まで来た

土曜日で休みだから居ないかと思つたが、たまたま練習をしていた

豪炎寺 「不動！話しがある！ちよつと顔をかせ！！」

豪炎寺の顔は怒りに満ちていた

不動は何事かすぐ分かった

不動 「お前にとやかく言われる筋合いねーんだけど？」

豪炎寺 「お前、何て卑劣な事したんだ、恥ずかしくないのか？」

不動 「俺は鬼道と違ってカッコつけたりなんかしない
欲しいモノを手に入れてなにが悪い？
俺は手段は選ばない」

豪炎寺 「その根性、叩き直してやる」

不動 「何だ？お前、鬼道の為に来たんじゃないか？お前も四季菜が
好きなのかよ？
面白え、望む所だ」

2人は取っ組み合いの喧嘩を始めた

かろうじて勝ったのは豪炎寺だった

豪炎寺は病院に戻った

四季菜 「豪炎寺君？喧嘩…したの？不動君と…」

豪炎寺 「ああ、あいつはもう現れないから」

四季菜は青ざめた

好きでもない人とHしてしまったのだ

豪炎寺 「フツ 俺だって好きでもない女を抱いた事がある

お前がその前に抱かれたのは大好きだった鬼道有人だ、少しは安心しろ

俺の事が好きだというのは嘘だ」

四季菜 「豪炎寺君…」

その後、母親が来て四季菜は父親と揃って退院した

四季菜は自分の部屋で何もかも思い出した

四季菜 「私、有人が好きだったんだ…
でも、フられたんだ、思い出した…」

四季菜は何時間も泣いた

名月に銃で撃たれた男が一命を取り留めた話しも聞いた

少しだけ心が救われた気がした

そして、豪炎寺の事を考えた

月から来た少女 イナイレ 第十八章

第十七章は

<http://novel118.syosetu.com/n1220z/1/>

2人は部活を終え、帰っていた

豪炎寺 「もうすぐFFIが開催するんだ」

四季菜 「…て事は鬼道君が？」

豪炎寺 「ああ、帰って来る」

四季菜は少しだけ胸がキュンとなった

豪炎寺は四季菜の不安そうな顔に心配になった

豪炎寺 「四季菜、お前大丈夫か？」

四季菜 「過去の事よ、大丈夫だって」

豪炎寺 「あ、ああ…」

FFIにはおそらく不動もヒロトも来る…
四季菜に会わせたくない

四季菜 「私、FFIの間はサッカー部に顔を出さないから安心
して？」

豪炎寺 「四季菜!？」

四季菜 「修也を…不安にさせたくないの」

豪炎寺 「ありがとう、四季菜…愛してる」

豪炎寺は四季菜を抱きしめた

3日後――鬼道はイタリアから戻って来た

春菜 「おかえり、お兄ちゃん!!」

秋 「ちょっと見ない間に背が伸びたんじゃない?」

円堂 「久しぶりだな?鬼道、イタリアはどうだった?」

鬼道 「背は5cm位伸びたんだ、久しぶりだな、みんな、イタ
リアは相変わらず強かったぞ」

円堂 「明後日は選考試合だからな、お互い頑張ろうぜ」

鬼道 「ああ、

向こうではフィディオと同じチームだったんだ、円堂によろしくと
言っていたぞ」

円堂 「そうかあ、早くフィディオ達と戦いたいぜ」

鬼道 「豪炎寺は？」

円堂 「あ、ああ 何か今日は用事があるってさ」

鬼道 「…そうか、…なら月影は？」

春菜 「四季菜さんは…えーと…あのう…」

鬼道 「フツ 今更何を聞いても驚かない」

秋 「今は…豪炎寺君と付き合っているわ」

鬼道 「…やはり…そうか、だが日本を経つ前から分かっていた
事だ」

春菜 「お兄ちゃん……」

四季菜 「今日帰って来るんでしょ？迎えに行かなくて良かったの？」

豪炎寺と四季菜は鉄塔広場のベンチに腰掛けていた

豪炎寺 「いいんだ…」

豪炎寺は四季菜を抱き寄せた

四季菜 「修也…？」

豪炎寺 「不安なんだ、お前を取られそうで…フツ 俺もバカだよな？お前が安心していいって言ってくれてるのに…」

四季菜は豪炎寺の首に手を回した

四季菜 「私は修也一筋だよ？不安ならいっぱいキスマーク付けていいよ？」

豪炎寺 「四季菜…」 ん ぎゅっ！

豪炎寺は何力所もキスマークを付けた

久遠 「今日はF F Iに向けて代表選考試合をする

去

年と一緒にチームはAとBに分かれてもらう

全員 自分を最大限にアピールしろ！」

全員 「はい!!」

沢山の学校の選手がこの試合を見に来ていた

だが四季菜の姿は無かった

鬼道と豪炎寺はチームが別れた

ピィー

豪炎寺はドリブルをしていた

鬼道 「ゴールは割らせない！」

鬼道と豪炎寺は2人でボールをキープし合った
力は互角でなかなか勝負がつかなかった

不動 「いつまでやってんだよ!!」

不動がジャッジスルー2を仕掛けて来た

豪炎寺ははね飛ばされた

豪炎寺 「……ぐっ……」

不動 「ちよつと強すぎちゃったかなあ？
エースストライカーさん？」

豪炎寺 （こいつ、ワザとやって来たな？）

鬼道 「不動！今のは下手したらイエローカードだぞ？」

不動 「今日はあんたの言う事なんか聞く気ねーよ？」

鬼道 「何…！？」

風丸 「豪炎寺！」

豪炎寺にパスが渡った

不動 「撃たせるかー！！」

不動はスライディングをして来た

豪炎寺 「ヒートタックル！！」

豪炎寺は炎をまとして不動を突破した

不動 「…くっ！」

豪炎寺「真 爆熱スクリュー！！」

円堂 「ゴッドキャッチー！！

……………うわああーっっ！！」

前より威力が上がったシュートはゴールに炸裂した

選考試合は終わった

久遠 「代表メンバーを発表する！

豪炎寺修也、基山ヒロト、宇都宮虎丸、染岡竜吾……」

次々と選手の名前が発表される

円堂、鬼道、豪炎寺は代表入りしたが不動の名前が呼ばれる事は無かった

不動 「ふざけるな！！何で俺が代表じゃねえんだ！？」

久遠 「今のお前は仲間を潰す事に必死になっている
チームの為に動けない選手は必要ない」

不動 「！！？」

四季菜 「えっ！アメリカに？」

母 「ええ、私もお父さんもそろそろNASAに復帰しないと……」

父 「お前も一緒に来なさい、1人では心配だ」

四季菜 「お父さん、私はアメリカへは行きません」

父 「四季菜……？」

四季菜 「でも、お願いがあります」

プルルル――

母 「 四季菜、電話よ、豪炎寺君から 」

四季菜 「 もしもし？修也？うん、

選考試合どうだった？ 」

豪炎寺 「 無事に選ばれたよ、円堂や鬼道もな ？ 」

四季菜 「 そう、おめでとう… 修也達なら絶対選ばれると
信じてたよ、早速明日から宿舎に缶づめだね？ 」

豪炎寺 「 ああ、休みはいつになるか分からない、お前に逢えないのが寂しいよ？ 」

四季菜 「 大事な話があるの、今話しても平気？ 」

豪炎寺 「 あ、ああ 何だ？ 」

四季菜 「 前に稲妻町の風景画をコンクールに出したの憶えてる？ 」

豪炎寺 「 ？ ああ、もちろん 」

四季菜 「 コンクールに…入賞したの 」

豪炎寺 「 本当か？ すごいじゃないか？ 」

四季菜 「それで…3ヶ月間、フランスに留学できる事になったの」

豪炎寺 「じゃあ、まさか……」

四季菜 「フランスに来週経つ事になったの……」

修也にもFFIが終わるまで逢えないし
応援に行けないのは残念なんだけど……」

豪炎寺 「全く逢えないのは寂しいが、せつかくのチャンスなんだ、行つて来いよ？」

四季菜 「ありがとう、修也ならそう言ってくれると思ったんだ」
「

豪炎寺 「愛してる、四季菜」

四季菜 「私も愛してる、修也……手紙書くから！」

豪炎寺は電話を切った

円堂 「聞いちゃった」
「

豪炎寺 「円堂？／＼／＼ 今の話、聞いていたのか？」

円堂 「人聞き悪い事言つなよ、お前のノロケが聞こえて来たんだって」

月影、応援に来てくれるのか？」

豪炎寺 「残念だが、応援には来ない
コンクールに絵が入賞したからフランスに留学するそうだな」

円堂 「えええゝっ！ マジいゝ？ でもあいつやっぱりすごいな！」

鬼道 「その話は本当か？」

豪炎寺 「鬼道？……ああ、本当だ」

鬼道 「あの絵の才能を埋れさすのは惜しいと思っていた……
良かったな」

鬼道……まさかお前まだ四季菜の事……？

父 「 お前のフランス行きを見送れなくてすまないな 」

母 「 今は技術者が少ないから早く戻らないとならなくて…
ちゃんと自分で支度して行くのよ？

戸締りもちゃんとしていつてね？ 」

四季菜 「 お母さん、大丈夫よ？ その位 1 人で出来るから…お父
さんもお仕事あまり無理しないでね？ まだ万全じゃないんだから 」

父 「 ありがとう、じゃ、行つて来るよ 」

母 「 向こうに着いたら連絡するわね？ 」

四季菜 「 行つてらっしゃい 」

四季菜の両親はアメリカへと旅立った

ザアアーーー

四季菜 「 うわぁ降り出した、ひどいどしゃ降りね、早く帰ろ
う 」

四季菜は空港から急いで家に帰った

家の前に来ると誰かが門の前で座っている

四季菜 「不動…君？」

そこにはびしょ濡れの不動がいた

不動 「よう、四季菜…？」

不動はそう言つとそのまま倒れてしまった

四季菜 「不動君！？ ……！ すごい熱！」

四季菜は急いで不動を家の中に引きずり込んだ
濡れた服を脱がせ、頭や体を拭いてやると自分の持っている大きめの服を着せた
ベッドに寝かせ沢山毛布をかけて温めた

四季菜 「不動君、何故ここにいるの？まさか代表に入れなかったのかしら…？」

四季菜は不動の体をさすつてなお温めた

次第に不動は汗をかきはじめたのでおでこや首を冷やした
夜中に何度も冷やしたタオルを取り替えた

そのうち朝になっていた

不動は目を覚ました

ふと見上げるとそこは四季菜の部屋だった

ベッドの横には四季菜が座りうつ伏せで眠っていた

不動 「 四季菜……看病してくれたのか…」

四季菜 「……うん…？」

四季菜も目を覚ました

四季菜 「 不動君、目が覚めたのね？熱は？」

四季菜は不動のおでこに手を当てた

四季菜 「 下がったみたいね？ 良かった
今 お粥作って来てあげる 」

四季菜はリビングに向かって急いでお粥を作った

四季菜 「 出来たよ、はい、どうぞ 」

不動はベッドから上体を起こした

パク……

不動 「 ……美味い……」

四季菜 「 良かった、熱いからゆっくり食べてね？」

不動 「 前は、悪い事したな…すまなかった…」

四季菜 「 その事なら、もういいから…
それより不動君、選考試合…ダメだったの？」

不動 「……ああ、ざまあねーよな？
豪炎寺に敵意むき出しにしちゃってな
チームの為に動けないヤツは要らないだと」

私の…せい？

四季菜の脳裏には名月の言葉が蘇っていた

「お前は皆を不幸にするんだ」

四季菜 「そう……でも不動君なら、また頑張れば途中から呼んでもらえるよ？」

不動 「お前、ほんとに優しいな……
俺…代表から外れたのがショックで…気付いたらお前ん家調べて来てた」

四季菜 「不動君…不動君なら絶対大丈夫だから、私、応援するから！

だから、サッカーとちゃんと向き合って
サッカーで人の事潰そうとか、そんなの考えないで…
私の為に誰かがもめるのは、もう嫌なの！
お願い…」

不動 「 豪炎寺が羨ましいよ、
何で俺じゃダメなんだ？

頼む、俺のそばにいてくれ…
でないと俺は…もつと落ちぶれそうで怖いんだ…」

不動は涙を流した

四季菜 「 不動君…」

不動君は私をすぐく必要としてる

不動君は、私が居ないとまたダメになるかも知れない

私…どうすれば…いいの

私が好きなのは修也なのに

目の前にいる不動君を放っておく事が出来ない

気付くと四季菜は不動を抱きしめていた

不動 「 四季菜…！！！」

不動君の気持ちを変えるなら…

四季菜 「 分かった、不動君が自信を取り戻せるまで私、そばに

いるよー」

四季菜はフランス行きをあきらめた

母親に報告するとひどく怒られた

最終的には四季菜の頑固な性格を認めてくれた

〽 宿舎 〽

鬼道 「今頃飛行機の中かな？」

豪炎寺 「ああ、そうだな」

2人は四季菜の乗るはずだった飛行機を見上げていた

不動は心を入れ直して帝国での練習に励んだ

帝国から四季菜の家は遠いので休みの日だけ遊びにきた
四季菜に手を出したりはしなかった
ただ一緒に勉強し、四季菜の作るご飯を食べ、話をして帰る
それだけで不動は幸せだった
癒されていた

その頃イナズマジャパンはアジアの決勝戦に突入していた

日曜日だったため四季菜と不動は一緒にテレビで観戦していた

TV 「ピーッ！ キックオフです！」

豪炎寺が染岡に軽く流して風丸に繋いでいた

相手は昨年と同じ韓国、チーム、ファイアードラゴン
相変わらずアフロ、バーン、ガゼルの3人は健在だった
後半残り5分まで2ー2の接戦だった
最後に得点を決めたのは豪炎寺だった

TV 「ピーッ！ 試合終了です！ 勝ったのはイナ
ズマジャパン！世界への切符を手に入れたのはイナズマジャパンで
す！」

四季菜 「やったっ！！」

四季菜は喜んだ

豪炎寺の活躍を見れた事もすごく嬉しかった

不動 「フッ 去年の今頃は俺も活躍してたのにな」

四季菜 「あ…不動君…」

不動 「あ、暗くなっちまうな？気にすんな、俺だってイナズマジャパンが勝ったのは嬉しいんだ、第一勝ち続けてもらわないと俺も復帰出来ないからな？」

四季菜 「うん、そーだね」

不動が前向きな考えになっていたのが四季菜にはすごく嬉しかった

でも一方では豪炎寺に後ろめたさを感じていた
手紙を書く約束したのに、書けるわけなかった

豪炎寺も手紙が来ないのを気にしていた

ヒロト 「四季菜ちゃんから手紙来た？」

豪炎寺 「それが、まだなんだ」

ヒロト 「ほんとに君達付き合ってるの？」

僕だって遠くにお見舞い行けなかった時に四季菜ちゃんの事頑張つて諦めたんだから、君達にはラブラブでいて欲しいんだよ？」

豪炎寺 「俺達はちゃんと愛し合ってる、

余計な心配は無用だ」

ヒロト 「四季菜ちゃんて困ってる人見るとほっとけない性格だからね」

豪炎寺 「何が言いたいんだ!？」

ヒロト 「何か胸騒ぎがするって事」

豪炎寺 「まさか……変な事言つなよ」

ヒロト 「ちゃんと捕まえないと、僕だって黙っていないよ？」

豪炎寺 「分かってるさ!」

とはいったもののヒロトの言葉で豪炎寺は急に不安になった
少し時間が出来たので四季の家に電話して母親に聞いてみようと思
った

プルルル―

ちょうどその時四季菜はトイレに入っていた

不動は四季菜の母親からの電話だと思い、電話に出ってしまった

不動 「はい、月影ですー」

豪炎寺 「その声はー！不動……!! お前何でそこに!？」

不動はびっくりしてとっさに電話を切ってしまった

四季菜 「どうしたの？」

トイレから戻って来て聞いた

不動 「豪炎寺から電話が来て、お前の親からだと思って出ちま
った……すまん」

四季菜 「……そ、そう？ でも不動君のせいじゃないよ？ 気に
しないで？」

不動 「もしこれで 豪炎寺に別れるって言われたらどうするん
だ？」

四季菜 「そしたら、それはそれで……しょーがないっ！ それも頭
に入れて不動君のそばにいるって決めたんだから……」

不動 「お前……ほんとーにバカでお人好しだな？ たく……もし
お前がフられたら俺がもらってやるよ？ / / / /」

四季菜 「クスッ 考えとく……」

鬼道君の時みたいにフられるかもな
でも私はあの時不動君を放っておけなかったんだ
後悔はしない
そう決めた

豪炎寺は動揺していた

鬼道 「 ？ 豪炎寺、どうしたんだ？ 」

豪炎寺 「 フランスに行ってる筈の四季菜の家に不動がいる 」

鬼道 「 どういう事だ！？ 」

豪炎寺 「 俺にだってさっぱり分からない、
あいつ、フランスに行くなんて嘘だったのか？
それで
隠れて不動と…… 」

鬼道 「 ……俺も不動が原因であいつと別れたんだ、だが今とな
っては後悔している 」

豪炎寺 「 鬼道…？ 」

鬼道 「 何かきつと事情があるに違いない、四季菜を信じてやれ
俺の二の舞になるな 」

豪炎寺 「 だが現に四季菜の家に不動がいるんだ、今だって何さ
れてるか分からない、あいつは前にだって四季菜の入院中にー 」

鬼道 「 入院中にどうしたんだ？ 」

豪炎寺 「 四季菜が抵抗しないのをいい事に強引に抱いて洗脳し
てたんだ 」

鬼道 「 何だって！？ 」

豪炎寺 「俺がフルボッコにして近づかせないようにしたんだが、あいつ、家にまで絶対に許せねえ……」

鬼道 「だがFFIが終わるまで帰れないんだ、プレーに支障が出るのは禁物だぞ？」

豪炎寺 「分かってる、それは十分気をつけるつもりだ」

何故なんだー四季菜？

何故お前が電話に出なかった

不動を何故招き入れているんだー

次の日曜日ー不動は四季菜の家に来なかった

久遠 「怪我をした土方に代わって新しいメンバーが入る」

円堂 「誰だ？」

久遠 「不動明王だ」

不動 「 よろしく願いします」

鬼道 「 ！！」

豪炎寺 「 不動、きさま…」ギリッ

不動は練習でアンチプレーはしなかった

チームの動きをよく捉え的確な指示をした

鬼道 「 あいつ、人が変わったようだな」

夕食時

豪炎寺 「 不動、ちよつといいか？」

不動 「 ああ、」

鬼道 「 ……」

2人は宿舎の外へ出た

不動 「 で、用って？」

豪炎寺 「 単刀直入に聞く、何故四季菜の家にした？」

不動 「 どうせ俺が何言っても信用出来ないんだろ？直接電話し

て聞いてみたらどうだ？」

豪炎寺 「くっ！……分かった、もういい」

豪炎寺の怒りは限界に来ていた

豪炎寺は電話をかけに行った

鬼道 「豪炎寺、食べないと持たないぞ？
電話より先に食事をとれ」

豪炎寺 「鬼道？……ああ、そうだな」

豪炎寺は食事を済ませると早々と席を立ちまた電話をかけに行った

プルルル……

四季菜 「はい、月影です？」

豪炎寺 「俺だ……」

豪炎寺は怒りで声が震えていた

四季菜 「修也……」

四季菜は緊張していた

自分からは何も言葉が出なかった

豪炎寺 「何故フランスに行っていない？」

四季菜 「…………キャンセル…したの…」

豪炎寺 「何故不動産が家に居た？」

四季菜 「……………」

豪炎寺 「答えろっ！！」

豪炎寺は怒りに任せて声を荒げてしまった

四季菜 「…不動産君の…そばについていてあげたかったの……」

豪炎寺は驚いた

四季菜からそんな言葉が出て来ると思わなかった

四季菜から不動産を招き入れてたなんて

信じたくなかった

我慢の限界だった

豪炎寺 「お前、男なら誰でもいいんだな？

よく分かったよ、俺達別れよう」

四季菜 「…………分かった…ごめんなさい…」

ガチャツ ツー、ツー、ツー、

豪炎寺は自分で最低な言葉を四季菜に言ってしまったと思った
それでも四季菜には泣きついてきて欲しいと思った
別れたくないと言って欲しかった

でも四季菜は言わなかった

別れても豪炎寺の心は全く晴れなかった

しばらく電話の前で立ち尽くしていた

四季菜は胸が締め付けられていた
心臓がちぎれそうだった

フられるのは覚悟していた
だが心が張り裂けそうな程ショックだった

男なら誰でもいいーそう思われても仕方ないと思った

「お前は皆を不幸にする」

名月の言葉がいつまでも頭から離れなかった

鬼道 「豪炎寺、大丈夫か？」

鬼道は心配してついてきていた

豪炎寺 「フッ お前の二の舞になったよ」

鬼道 「豪炎寺……」

豪炎寺 「俺は……サイテーだ……四季菜に

言葉の暴力を浴びせてしまった」

鬼道 「お前、本当にこのままでいいのか？」

豪炎寺 「もう、元には戻れない……いいんだ、もう」

プルルル――

また同じ番号で電話が鳴った

四季菜は豪炎寺かもと淡い期待を抱いた

四季菜 「はい、月影です」

不動 「悪いな、俺だ……」

四季菜 「不動君？あなたもライオコットに居るの？」

不動 「ああ、土方が怪我して交代で選ばれたんだ」

四季菜 「そう、頑張ったかいがあったね、おめでとう……土方君には悪いけど……」

不動 「全部お前のおかげだ……ありがとな」

四季菜 「本当に良かったね？ 私が役に立てたなんて嬉しいよ」

不動 「帰ったら俺がもらってやるよ?」

四季菜 「不動君、気持ちは嬉しいけど、あなたは私がいなくて
もう大丈夫、私から卒業しなさい?」

不動 「フッ 卒業…か、分かったよ、今までありがとう?
じゃあな」

四季菜 「試合、頑張つてね、さよなら…」

四季菜は電話を切った

その日の夜は一晩中泣いた

月から来た少女 イナイレ 第十九章

豪炎寺は試合では感情を出さなかった

不動ともめなかった

イナズマジャパンは見事世界一 になった
FFI二連覇を達成して日本に戻って来た

鬼道は四季菜の家を訪ねた

チャイムを鳴らしても四季菜は居なかった

もしやと思い鉄塔広場に行ってみた

やはり四季菜はそこに居た

四季菜はベンチに座って景色を見ていた

鬼道 「ここにいたのか？」

四季菜 「鬼道君？」

四季菜は鬼道が話しかけて来たので驚いた

四季菜 「私とは顔を合わせたくなかったんじゃないの？」

四季菜は少し痩せていた

鬼道は四季菜の隣に座った

鬼道 「豪炎寺との事、気になってな…」

四季菜 「もう過ぎた事よ、あなたの事もね？」

四季菜は冷めた口調で言った

四季菜 「そうそう、優勝おめでとう、イナズマジャパンなら世界一になれるって信じてたよ？」

四季菜は笑った

鬼道 「ありがとう、俺達がここまで強くなれたのもお前の特訓のおかげだ」

四季菜 「そんな事ない、みんなその後も努力したからよ」

鬼道 「不動の事、誤解なんだろう？」

四季菜 「誤解じゃないよ、そばについてあげたかった、あのまま放っておいたら、彼はダメになるところだった私 名月に言われたの、お前は皆を不幸にするってでも不動君だけは私が助けてあげられたそれが、すごく嬉しいの」

四季菜 「不動君ね、うちに毎週遊びに来たんだけど私に指一本、

触れていかなかったんだよ？ 色々反省してみたい…」

鬼道 「不動の事、好きなのか？」

四季菜 「うっん、豪炎寺君にふられたら俺がもらってやるよって言われたけど
もう私から卒業出来るよって言ったの」

鬼道 「……そうだったのか
俺、今なら分かる、あの時のお前の気持ち」

四季菜 「何で私達、別れちゃったんだろうね？」

鬼道 「俺が気持ちに余裕がなかったんだ
今では後悔してる
なあ、俺達、もう一度元に戻れないか？」

四季菜 「もう前のようにには戻れない、時間は進んでいるのよ？」

鬼道 「そうか……俺は一生悔やむんだろうな、お前の手を離れた事」

四季菜 「いつかいい人が現れるよ？」

鬼道 「……だといいがな」

四季菜 「私ね、明日からアメリカに行くの」

鬼道 「……え？何故だ？」

四季菜 「両親がNASAへ復職したの、一緒に来なさいって
みんなにはさよならは言わないで行くから」

鬼道 「何故さよならも言わずに行くんだ？」

四季菜 「寂しくなっちゃうから」

四季菜は涙を流した

鬼道は四季菜を抱きしめた

四季菜 「有人…大好きだったよ…ありがとう…」

鬼道 「俺は今でもお前を愛している…頼む、行くな!!」

四季菜 「ごめんなさい…」

四季菜は鬼道の腕を振りほどいて去って行った

鬼道は豪炎寺の家まで行った

豪炎寺 「どうしたんだ？鬼道」

鬼道 「四季菜が明日アメリカへ経つ」

豪炎寺 「え?…」

鬼道は豪炎寺に不動の事や何故アメリカに行くのかを説明した

豪炎寺は四季菜を誤解していた事を悔やんだ

豪炎寺 「あいつ、そう言えば良かったのに、電話じゃあんな誤解するような言い方しやがって……」

鬼道 「見込みがあるとは思えないが今の気持ちを伝えたらどうだ？」

豪炎寺 「フッ お前はどんなんだ？」

鬼道 「フッ もう言ったさ、見事に玉砕したかな」

豪炎寺 「……俺、今から行って来るよ？」

鬼道 「ああ、頑張れよ？」

豪炎寺は急いで走って四季菜の家まで行った

ピンポーン ♪

インターホン 「どちら様ですか？」

豪炎寺 「俺だ…ハアハア…」

ガチャッ！

四季菜 「豪炎寺君？どうしてここに？」

豪炎寺 「鬼道から聞いた」

四季菜 「彼、おしゃべりね」

豪炎寺 「すまない、不動との事、誤解していた」

四季菜 「ううん、私が全部いけないの、豪炎寺君は謝らないで？」

豪炎寺 「ひどい事言つて悪かった、すまない」

四季菜 「言われて当たり前よ、気にしないで？」

豪炎寺 「俺、お前が好きだ…お前は俺の事まだ好きか？」

四季菜 「知つて…どうするの？」

豪炎寺 「答えてくれ！！どうなんだ？」

四季菜 「…そんな簡単に嫌いになれるワケ…ないじゃん！！」

四季菜は下を向いた

豪炎寺は四季菜を抱きしめた

豪炎寺 「行かないでくれ、四季菜、俺にはお前が必要なんだ！！」

四季菜 「意地悪な事言わないで、やっと気持ちに踏ん切りつけ

たのに……」

四季菜は泣いた

豪炎寺 「お前を離したくない、俺、お前の言う事何でも聞くから、だから俺のそばにいろ!!」

四季菜 「ごめんなさい……もう決めた事なの」

四季菜は豪炎寺から離れた
そして家の中へ入って行った

豪炎寺は泣きながら家に帰った

次の日……四季菜は旅立った

見送りには行かなかった

田堂 「ええーっ？四季菜がアメリカへ？」

春菜 「お兄ちゃん！何で言ってくれなかったの？」

夏末 「見送られると寂しくなるからって言ってたわ」

染岡 「特訓のお礼、とうとう言えなかったな」

風丸 「いい子だったな」

秋 「いつかまた会えるかしら？」

冬花 「会えますよ、きっと」

鬼道 「やはりお前も玉砕か……」

豪炎寺 「ああ……」

愛している……月影四季菜……幸せになれよ

く アメリカ く
とあるマンション

四季菜 「早く片付けちゃわなきゃ」

ピンポン ♪

四季菜 「はぁーい」

ガチャッ！

「プロトタイプ！」

「ピロート? ズーって?」

「ヒロト、四季菜ちゃんがつたつて聞いて……来ちゃった」

「来ちゃったって……ここアメリカだよ？」（^^;;）

ヒロト 「父さんに無理言つて留学させてもらう事になったんだ、お隣に越して来たからよろしくね？」

そうそう、お土産があるんだ」

四季菜
「お土産？」

フルーツの盛り合わせ、前に果物好きだっ

新たな恋の予感――???

$$\{$$

END

§

駄作ですが見て頂いてありがとうございました

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8583y/>

月から来た少女 イナイレ

2011年12月5日19時09分発行